博多（はかた） 112

―博多遺跡群第153次調査報告―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第942集

2007

福岡市教育委員会

はか　　た

博　多　112

―博多遺跡群第153次調査報告―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第942集

調査番号　０５２４
遺跡略号　HKT-153

２００７

福岡市教育委員会

(1)　21号土壙埋納遺物出土状況

(2)　21号土壙出土遺物

序

JR博多駅から博多湾を望む一帯は、二千年余の昔から大陸文化の窓口として栄えたところであり、中世には貿易都市「博多」として繁栄を極めた所です。

この博多の町も、近年さらに都市部の再開発が進み、200次におよぶ発掘調査が実施されています。これらの調査で出土する大量の輸入陶磁器は、まさに国際貿易都市「博多」の繁栄を彷彿とさせるものがあります。

今回の報告する第153次調査では、頑健な基礎石列上に築かれた大型建物跡や青銅器を埋納した土壙など近世初めの遺構が発見されました。この下呉服町界隈は、安土桃山時代に貿易商として活躍した豪商嶋井宗室や神屋宗堪などが住まいとした所です。この大型の建物跡の発見は、その建築方法や構造および太閤町割後の町並みの発展を知る上で貴重な発見となりました。

本書は、これらの発掘調査の成果を収録したものです。本書が市民のみなさんに広く活用され、埋蔵文化財保護に対するご理解の一助になるとともに、考古学や地域史の研究に活用していただければ幸いです。

なお、発掘調査から整理報告までの間には、多くの方々のご指導とご協力をいただきました。記して心から感謝の意を表する次第であります。

平成19年３月30日

福岡市教育委員会
教育長　植木　とみ子

れいげん

1．本書は、福岡市教育委員会が株式会社リファレンスの共同住宅建設に先立って、2005（平成17）年７月22日～９月22日までに福岡市博多区下呉服町425番２、426番２で発掘調査した博多遺跡群第153次調査の発掘調査報告書である。
2．本書に使用した方位はすべて磁北方位である。
3．遺構は、建物跡をSB、石組土壙と土壙をSK、井戸跡をSE、ピットをSPと記号化して呼称し、その後にすべての遺構を通番して01からナンバーを付した。
4．本書に掲載した挿図は遺構を小林義彦が、また遺物は小林と今村ひろ子が作成した。
5．本書に掲載した遺構と遺物の製図は、小林と今村が作成した。
6．本書に掲載した遺構と遺物の写真は小林が撮影した。
7．本書の執筆・編集は小林が行った。なお、21号土壙より出土した青銅器および鉄器の保存処理と科学的分析を比佐陽一郎（福岡市埋蔵文化財センター）氏に、また近世の大型建物跡に関する歴史学的検討を**髙**山英朗（福岡市博物館学芸員）氏に依頼してその成果を付論として掲載した。
8．本書に係わる遺物と記録類は一括して埋蔵文化財センターに保管している。

本　文　目　次

序
Ⅰ．はじめに …… 1
　1．発掘調査にいたるまで …… 1
　2．発掘調査の組織 …… 1
　3．立地と歴史的環境 …… 3
Ⅱ．調査の記録 …… 6
　1．調査の概要 …… 6
　2．基本的層序 …… 7
　3．建物跡（SB） …… 7
　4．井戸跡（SE） …… 13
　5．土壙（SK） …… 14
　6．包含層出土の遺物 …… 22
Ⅲ．おわりに …… 32

挿　図　目　次

巻頭図版　(1)21号土壙埋納遺物出土状況　(2)21号土壙出土遺物
Fig. 1　博多遺跡群位置図（1／30,000） …… 2
Fig. 2　博多遺跡群第153次調査区位置図 …… 4
Fig. 3　第153次調査区位置図（1／1,500） …… 5
Fig. 4　第153次調査区周辺現況図 …… 5
Fig. 5　遺構配置図（1／100） …… 6
Fig. 6　調査区全景（西より） …… 7
Fig. 7　27号建物跡実測図（1／60） …… 8
Fig. 8　27号建物跡全景（西より） …… 9
Fig. 9　27号建物跡（東より） …… 9
Fig. 10　27号建物跡（北より） …… 9
Fig. 11　27号建物跡（西より） …… 9
Fig. 12　27号建物跡（東より） …… 9
Fig. 13　27号建物跡出土遺物実測図１（１／３） …… 10
Fig. 14　27号建物跡出土遺物実測図２（１／３） …… 11
Fig. 15　27号建物跡出土遺物（１／３） …… 12
Fig. 16　３号井戸跡（北より） …… 13
Fig. 17　４号井戸跡（北より） …… 13
Fig. 18　３・４号井戸跡出土遺物実測図（１／３） …… 13
Fig. 19　７号井戸跡実測図（１／30） …… 14
Fig. 20　７号井戸跡（南より） …… 14
Fig. 21　７号井戸跡出土遺物実測図（１／４） …… 14
Fig. 22　４号井戸跡出土遺物（１／３） …… 15
Fig. 23　１号土壙実測図（１／30） …… 15

Fig. 24　1号土壙（南より）…… 15
Fig. 25　1号土壙出土遺物実測図（1／3・1／4）…… 16
Fig. 26　2号土壙実測図（1／30）…… 17
Fig. 27　2号土壙（西より）…… 17
Fig. 28　2号土壙出土遺物実測図（1／3）…… 17
Fig. 29　5・6号土壙（西より）…… 18
Fig. 30　5号土壙実測図（1／30）…… 18
Fig. 31　5号土壙（北より）…… 18
Fig. 32　5号土壙南北断面（西より）…… 18
Fig. 33　6号土壙実測図（1／40）…… 19
Fig. 34　6号土壙（南より）…… 19
Fig. 35　6号土壙南北断面（西より）…… 19
Fig. 36　6号土壙出土遺物実測図（1／3）…… 20
Fig. 37　8号土壙実測図（1／30）…… 20
Fig. 38　8号土壙（西より）…… 20
Fig. 39　9号土壙実測図（1／30）…… 21
Fig. 40　10号土壙実測図（1／40）…… 21
Fig. 41　9・10号土壙（南より）…… 21
Fig. 42　11号土壙（南より）…… 21
Fig. 43　12号土壙実測図（1／30）…… 22
Fig. 44　12号土壙（東より）…… 22
Fig. 45　12号土壙出土遺物実測図（1／8）…… 22
Fig. 46　13・14号土壙（南より）…… 22
Fig. 47　16号土壙実測図（1／30）…… 23
Fig. 48　16号土壙（西より）…… 23
Fig. 49　21号土壙実測図（1／30）…… 23
Fig. 50　21号土壙土層断面（東より）…… 24
Fig. 51　21号土壙（東より）…… 24
Fig. 52　21号土壙遺物出土状況（北より）…… 24
Fig. 53　21号土壙出土遺物実測図（1／3）…… 25
Fig. 54　21号土壙出土遺物（1／4）…… 25
Fig. 55　土壙出土遺物実測図（1／3）…… 26
Fig. 56　瓦拓影（1／3）…… 27
Fig. 57　F―7区遺物状況実測図（1／20）…… 28
Fig. 58　F―7区遺物出土状況（東より）…… 28
Fig. 59　包含層出土遺物実測図1（1／3）…… 28
Fig. 60　包含層出土遺物実測図2（1／3）…… 29
Fig. 61　包含層出土遺物実測図3（1／3）…… 30
Fig. 62　銅銭拓影（2／3）…… 30
Fig. 63　土壙出土遺物（縮尺不同）…… 31
Fig. 64　包含層出土遺物（縮尺不同）…… 32
Fig. 65　出土土錘（縮尺不同）…… 34

Ⅰ．はじめに

1．発掘調査にいたるまで

中世に貿易都市として栄えた「博多」は、弥生時代より大陸文化の窓口として長い歴史をもち、その町並みの下には幾層にも重なったさまざまな遺構や遺物が眠っている。この博多の町も、都市空間の有効利用を図った高層ビル化が進み、その波は路地に面した旧市街地にも及んでいる。博多遺跡群を構成する海に面した「息の濱」の下呉服町から奈良屋町・神屋町でも高層のオフィスビルや共同住宅が盛んに建設されている。

こうした中、博多区下呉服町425番２・426番２地内で、株式会社リファレンスによるマンションの建築が計画され、その設計にあたったツノダ設計より埋蔵文化財の有無についての照会が2005（平成17）年３月14日に提出された。この地は、バブル期にマンションの建設計画があり、1990（平成２）年９月12日に試掘調査が実施され、焼土塊の集積層を伴う室町時代以降の複数面の遺構や遺物が確認されていた。このためマンションの建設に際しては、発掘調査による記録保存が必要であった。

発掘調査は、はじめ５月18日から開始する予定で調整が進められたが、周辺住民への事前協議に時間を要したために二度にわたって順延された。その後、同意が得られたとの連絡を受けて、2005（平成17）年７月22日に本調査を開始した。発掘調査では、撹乱壙の除去と排土の仮置き、搬出に多くの労力を要した。殊に、間口の狭い調査区の入口に排土の山積みを余儀なくされた。そのため排土置き場はすぐいっぱいになり、頻繁な排土の搬出を強いられた。この時間と費用を要する煩雑なことも大島建設宮崎氏のご理解と協力でクリアーでき、調査の大きな障害にはならなかった。ここに記して謝意を表します。一方、発掘調査では、厚い基礎石列をもった大型の建物跡と埋納された青銅製容器が発見される予期せぬ成果を得て９月22日に予定通り無事に終了した。また、この年の夏は異常な酷暑の毎日であった。加えて深く風通しの悪い調査区は、鉄板の矢板で囲まれた輻射熱で蒸し風呂のような環境であった。この悪条件の中で発掘調査に従事した方々の労苦にも改めて感謝します。

2．発掘調査の組織

調査委託　株式会社　リファレンス
調査主体　福岡市教育委員会
調査総括　文化財部埋蔵文化財第１課
　文化財部長　山崎純男
　埋蔵文化財第１課長　山口譲治（前埋蔵文化財課長）
　埋蔵文化財第１課調査係長　山崎龍雄　池崎譲二（前埋蔵文化財課第２係長）
調査庶務　文化財管理課　榎本芳治　鈴木由喜（前文化財整備課）
調査担当　埋蔵文化財第１課　小林義彦
調査・整理作業　石橋陽子　今村ひろ子　嶋ヒサ子　大瀬良清子　熊本交神　為房紋子
　塚本よし子　土斐崎孝子　永野麻子　西田文子　野田淳一　播磨博子
　馬場イツ子　平川正夫　福田操　藤井羊子　三栗野明美　持丸玲子　森田祐子
　矢川みどり　山口慶子　山崎光一

発掘調査にあたっては、株式会社大島組の宮崎安朗氏をはじめ、関係者諸氏に多くのご協力とご配慮をいただいた。また、山口譲治、池崎譲二、常松幹雄、比佐陽一郎氏には指導と助言を受けた。協力に感謝を申し上げるとともに本報告に十分に生かせなかった力量不足を深くお詫びする次第である。

Fig. 1　博多遺跡群位置図（1／30,000）

3. 立地と歴史的環境

博多湾にむかって開口する福岡平野は、三方を三郡山系や背振山系からのびる小山塊に囲まれた沖積平野である。この福岡平野には、御笠川と那珂川の二筋の流れが河口を接して博多湾に注いでいる。

博多遺跡群は、この二つの河川に挟まれた博多湾岸沿いの古砂丘上に立地し、南は旧比恵川によって画されている。

この博多湾に面した東西400m、南北1,000mの古砂丘上に占地する博多遺跡群は、弥生時代から古代、中世を経て近世まで連綿とつづく大複合遺跡である。殊に、古代には中国や朝鮮半島からの陶磁器類の輸入窓口として、また中世には泉州堺と並ぶ貿易都市として繁栄を極めたところである。この博多遺跡群の発掘調査は、1977（昭和52）年の高速鉄道祇園町工区の調査に始まり、これまで200地点に及ぶ発掘調査が行われ、二千年余に及ぶ歴史の全貌が次第に明らかになりつつある。

博多遺跡群を概観すると、その初見は弥生時代前期後半に遡る。はじめに祇園町交差点を中心とする古砂丘上に住居跡群や甕棺墓群が営まれる。ここは博多遺跡群を作る二つの古砂丘の陸側の「博多濱」の中央部で、古砂丘の最高所にあたり、中期から後期には後背地に向かって拡大していく。

次ぎの古墳時代になると、砂丘の前進に伴って北の上呉服町周辺まで拡がっていくが、遺跡の中心は未だ「博多濱」の最高所にあり、竪穴住居跡や方形周溝墓などが営まれる。一方、古砂丘東側の第28次調査では、墳丘長が56mを超える5世紀初頭に造営された前方後円墳の「博多1号墳」、第109次調査では「博多2号墳」が確認されている。これらの前方後円墳は、那珂川右岸に展開する前方後円墳群の一翼として位置づけられ、相応の勢力をもった首長層の存在が推考される。

更に、「那の津」の官家が設置された536（宣化1）年以降、古代になると博多遺跡群は対外貿易の拠点としての性格を強め、遺跡は「博多濱」全域に亘って拡がっていく。688（朱雀3）年に初見する「筑紫館」、842（承和9）年以降に現れる「大宰府鴻臚館」は、博多遺跡群から入り海ひとつを隔てた丘陵上に位置している。博多遺跡群に官衙が置かれた記録はないが、鴻臚館式や老司式の瓦、皇朝十二銭、円面硯、石帯、緑釉や灰釉陶器のほか越州窯系青磁、長沙窯系陶器などの多種多量の輸入陶磁器が出土し、官衙的色彩の濃い施設の存在を想起させるとともに貿易都市としての性格を強めていったものと思われる。一方、909（延喜9）年の遣唐使の廃止は、私貿易の隆盛を促すこととなり、古代末からは対宋貿易の中心地となる。発掘調査で検出される遺構や遺物の多くは、11世紀後半から13世紀前半のものであり、夥しい量の輸入陶磁器が出土するのもこの時期である。また、11世紀後半には「博多濱」北限の潟が砂州状に埋め立てられ、呉服町交差点付近で北の「息の濱」と繋がる。

鎌倉時代には、「息の濱」の開発が進み、「博多濱」と一体化して都市「博多」を形成する。13世紀後半から14世紀初めには砂丘上に幾筋もの道路が開削され、室町時代を通して供用されるが相互間の規則性や統一性は有していない。しかしながら、これらが中世後半期における都市「博多」の町並みの概観を示している。一方で、「元寇の役」の後には鎮西探題府が置かれ、対外貿易都市としての機能のみならず西国の政治的中心地としての側面も備えてくる。

室町時代には、「息の濱」が一層の発展を遂げ、博多の都市機能の中心は「博多濱」から「息の濱」へ移る。交易商たちは、朝鮮半島や中国大陸のみならず、遠く東南アジアにまで進出する。このことはベトナムやタイの陶磁器の出土によって裏付けられる。また、博多にも和冦の記録があり、海賊である和冦によって民間貿易が担われていた側面も窺える。一方、政治的には足利幕府によって九州探題が置かれたが、南朝方の反幕的勢力が強く、その政治力や軍事力は強大なものとはなり得なかった。

下呉服町や奈良屋町では、第68次・82次・101次・111次・113次調査が行われ、111次調査では、キリシタンのメダイも出土しており、戦国末期から江戸初期の町並みの様相を如実に示している。

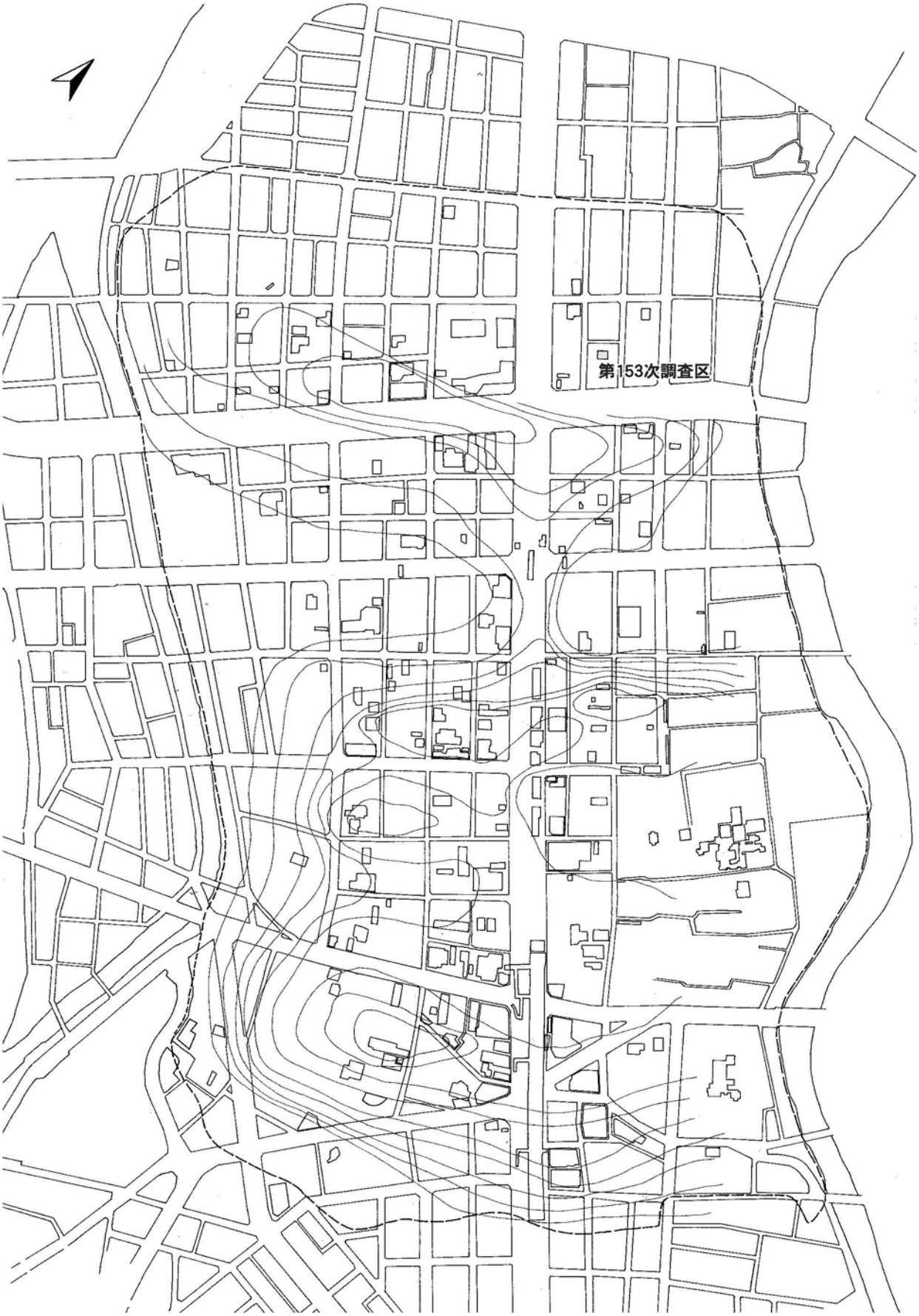


Fig. 2　博多遺跡群第153次調査区位置図

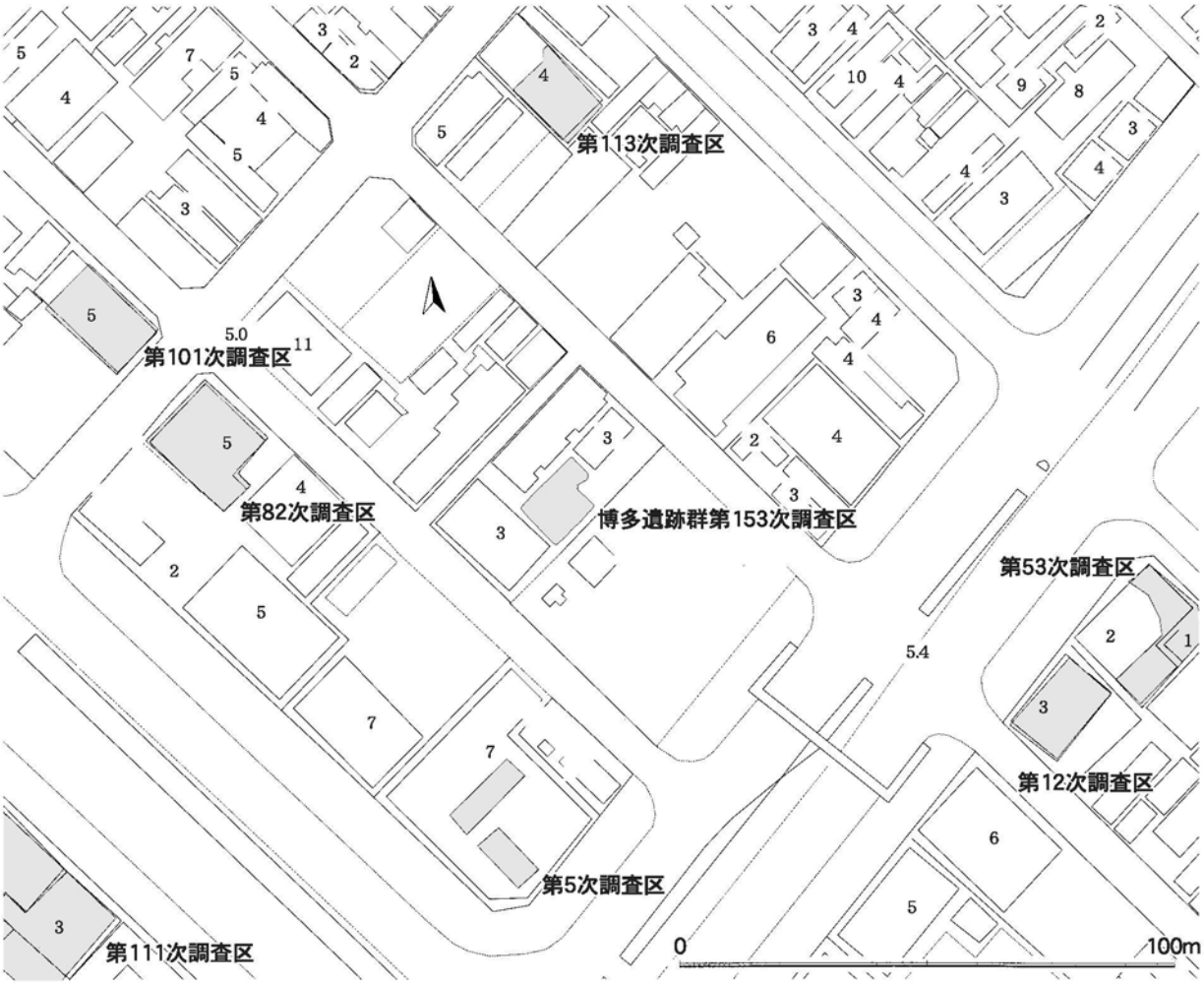


Fig. 3　第153次調査区位置図（1／1,500）

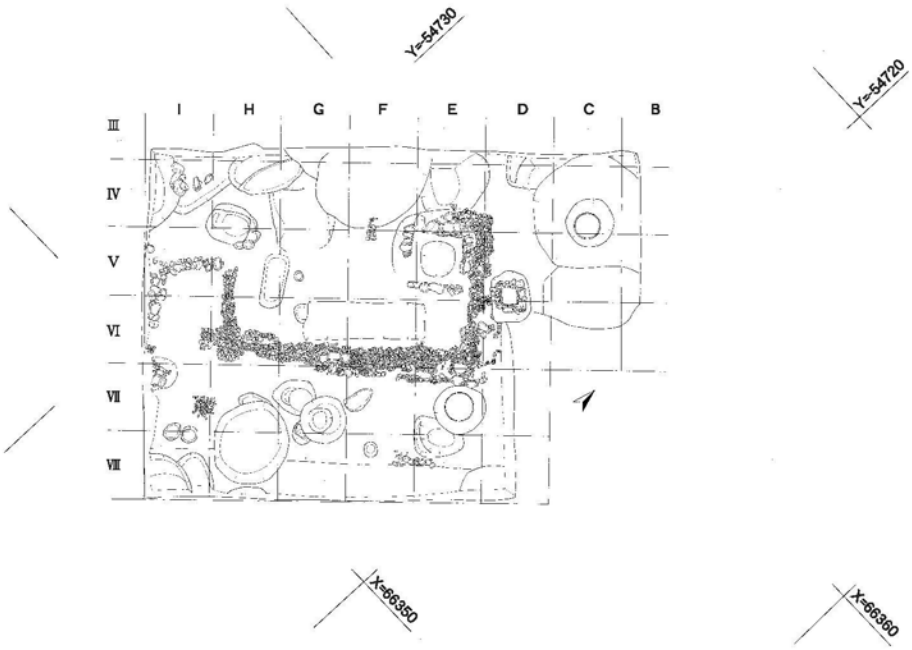


Fig. 4　第153次調査区周辺現況図

Ⅱ．調査の記録

1．調査の概要

博多遺跡群は、博多湾に面して南北に並ぶ「博多濱」と「息の濱」のふたつの古砂丘からなる。第153次調査区は、この博多遺跡群の北東部に位置し、遺跡群を形成する海側の古砂丘「息の濱」の北東端、砂丘が東へむかって傾斜をはじめる緩斜面上に立地する。

博多遺跡群は、弥生時代から中・近世までの一大複合遺跡で、黄白色砂層の基盤層までの間には1～5ｍにも及ぶ遺物包含層が厚く堆積している。この遺物包含層には幾面もの遺構面が重層的に刻まれているが、堆積土壌の変化を明確に捉えられないことが多い。また、整地層や焼土層が検出されても面的な拡がりとして捉えられないのが一般的である。このため発掘調査では、明確に遺構を把握できる安定した面まで恣意的に掘り下げて遺構面を検出し、更にその包含層を掘り下げて下層の遺構面を検出すると云う方法を選択した。

第153次調査区では、GL－130㎝、標高４ｍで第１面を、その下層－100㎝、標高３ｍで第２面の遺構面を検出した。このうち第１面はおおむね近世期の遺構面で、調査区の真ん中には大型の建物跡の基礎石列があり、さらにその北縁には井戸跡や土壙などが重複して調査区の大半を占めている。このように大きな遺構が調査区の中央部を占地しているために、第２面の遺構はきわめて限られた範囲でしか確認できなかった。

第１面では、建物跡１棟、井戸跡３基、土壙18基を、第２面では土壙３基とPit５基を検出した。

遺構は、すべてを通番した２桁の数字で表示し、その巻頭に遺構記号を付して表示した。

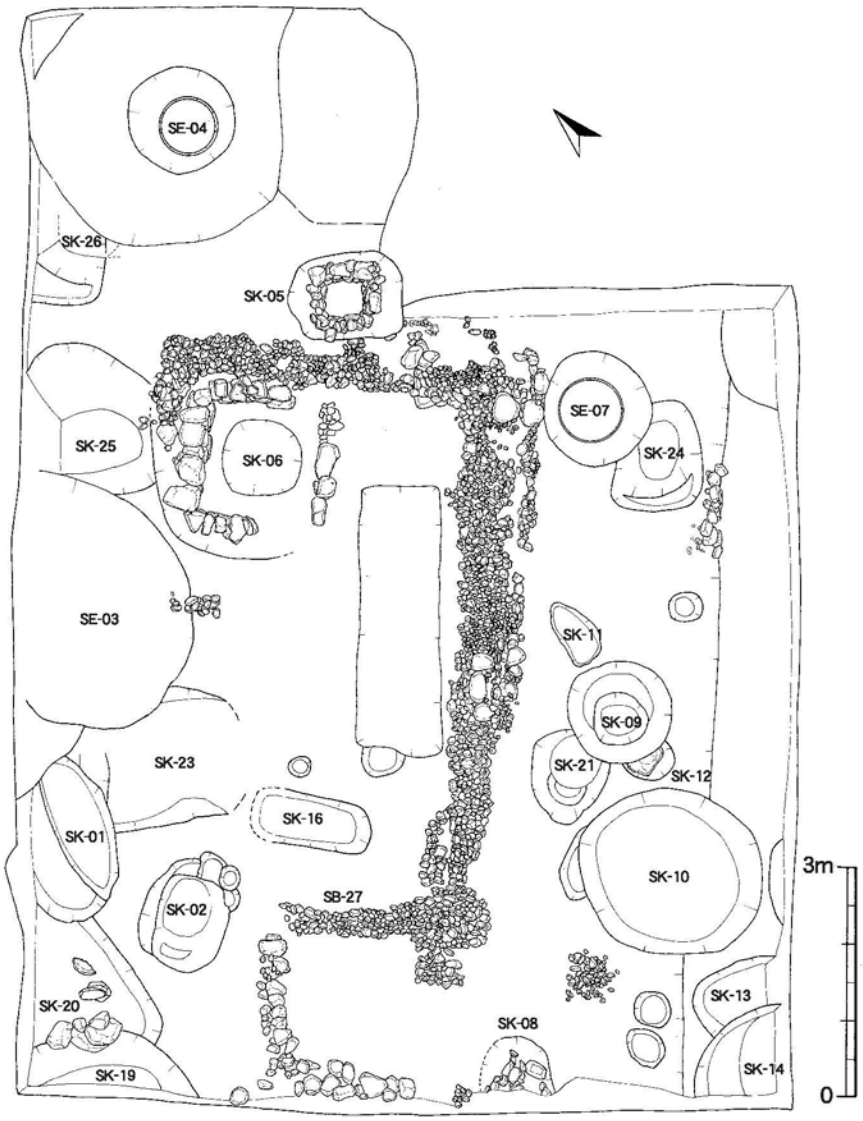


Fig. 5　遺構配置図（1／100）

2. 基本的層序

第153次調査区は、博多遺跡群を形成する海側の古砂丘上に立地しており、砂丘上面の風成砂層である淡黄色砂を基盤層（地山面）としている。この黄白色砂層は、細砂・中砂・祖砂が－９～10mの深度まで互層的に堆積し、その下層には砂質土を主体とするシルト質土や礫層などの洪積層があり、深度30mに至って砂質頁岩からなる古第三紀層の基盤層となっていることが一般的である。

第153次調査区は、現地表下－130㎝、標高４mで近世の遺構面を検出した。調査区の南縁には祖砂層が、また北縁には細砂層があり、中央部には幅６mにわたって灰黒色土層が堆積していた。この灰黒色土の整地層中に大型の建物跡が収まっており、重量物の構築にあたって地盤の強化が行われたものと推考される。また、建物を構築した整地層下には旧表土層の淡い灰黒色砂土層が薄く堆積しており、厚い細砂層や祖砂層は二次的な整地層である。殊に、南縁の祖砂層と灰黒色土層との境は不自然に直線的な違いを示していることもその証左となる。

建物跡をはじめとする遺構面上には、遺物包含層が薄く堆積していたが分層化して遺構面として確認することはできなかった。

3. 建物跡（SB）

建物跡は、調査区の中央部で礎石を敷き詰めた大型の建物（SB－27）１棟を検出した。この建物跡の西にも扁平な円礫を敷き並べた礎石列がある。また、南に面して同質の礫石を敷いた一群がブロック状に残っており、この大型の建物跡に繋がる建物があった可能性も想起される。また、検出された柱穴は少ないが、第１面や２面のPitには壙底に礫のあるものもあり、建物跡の可能性も否定できない。

Fig. 6　調査区全景（西より）

27号建物跡　SB－27
（Fig. 7～15・56）

27号建物跡は、調査区の中央部に位置する東西棟の大型建物で、拳大の円礫と角礫を厚く敷き詰めて基礎石としている。基礎石は、幅が約100㎝、深さが70㎝の舟底状の溝に礫石を詰めている。礫石は、壁際から溝底にはやや大きめの拳大に礫石を並べ、中の方は小

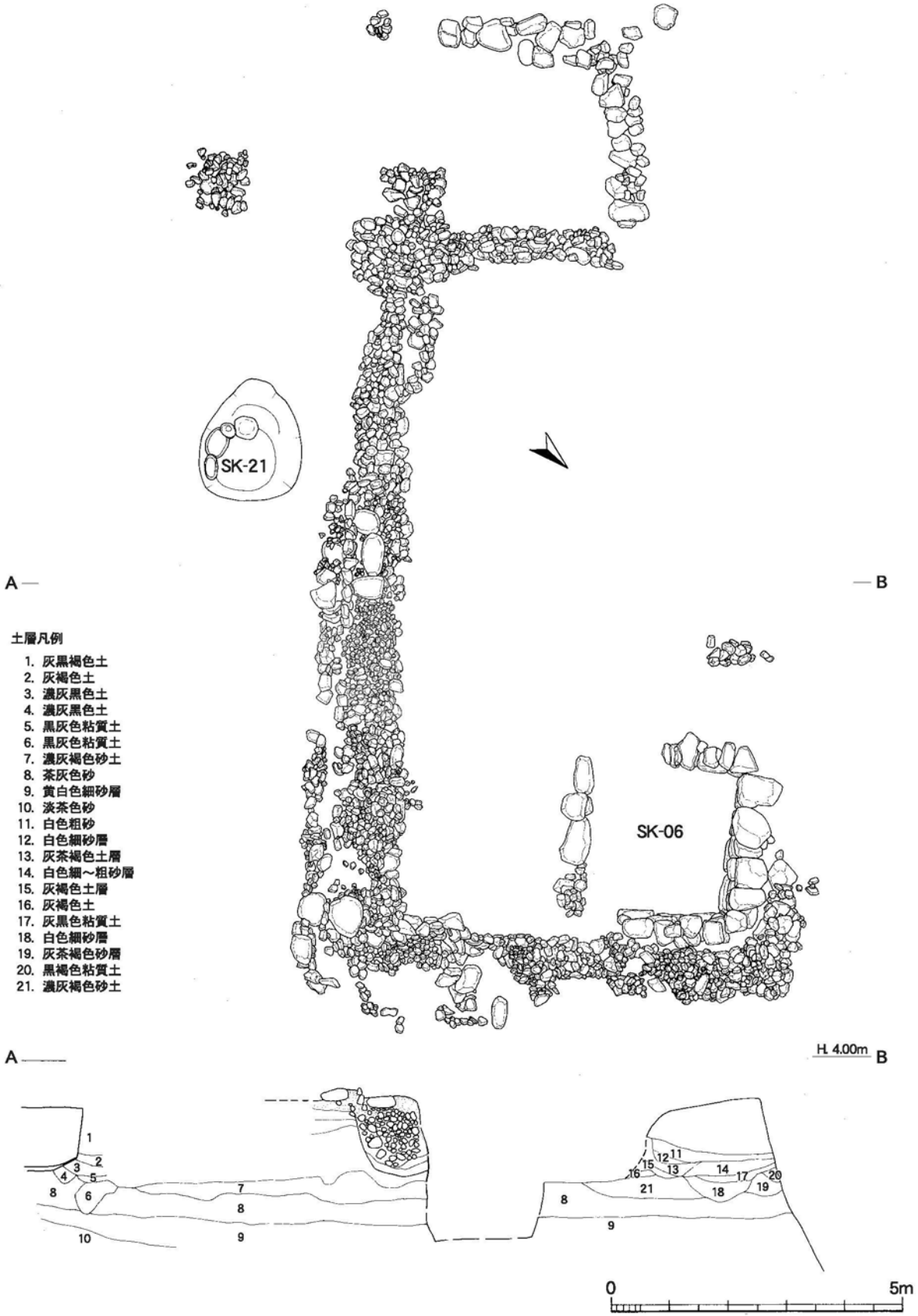


Fig. 7　27号建物跡実測図（1／60）

さい礫石を密に詰め固めている。この基礎石列は、全体に被熱による赤変が観られ、周辺の砂土と赤く焼けている。基礎石群の脱水と強固化とも聞き及ぶが定かではない。一方、南桁行列のほぼ真ん中には長さ45㎝、幅25㎝の扁平な円礫を横に敷き、その両側に長さ35㎝、幅25㎝の扁平な円礫を縦に揃えて框状に据えている。円礫の南側には5㎝×10㎝大の角礫を2～3段積み上げた壁状の石列が130㎝の長さで残っている。この円礫の右手には21号土壙が接してあり、密接な関連性が窺われる。この基礎石列の西には大きめの扁平な円礫や角礫を矩形に敷き並べた石列がある。一見、27号建物の基礎石列と一体化して思われるが、素材にも構造的にも相違が大きく、異なる構造物と考えるのが至当であろう。規模的には、北列と西列の北半が消失しているが、南基礎の框状の円礫を中心にして桁行長は9m、梁間は5.4mで、桁行5間、梁間3間となる。この基礎石列の幅は、100～120㎝あり、柱筋をその中心にすれば桁行長は7.2m＝4間2尺、梁間長は4.2m＝2間2尺に

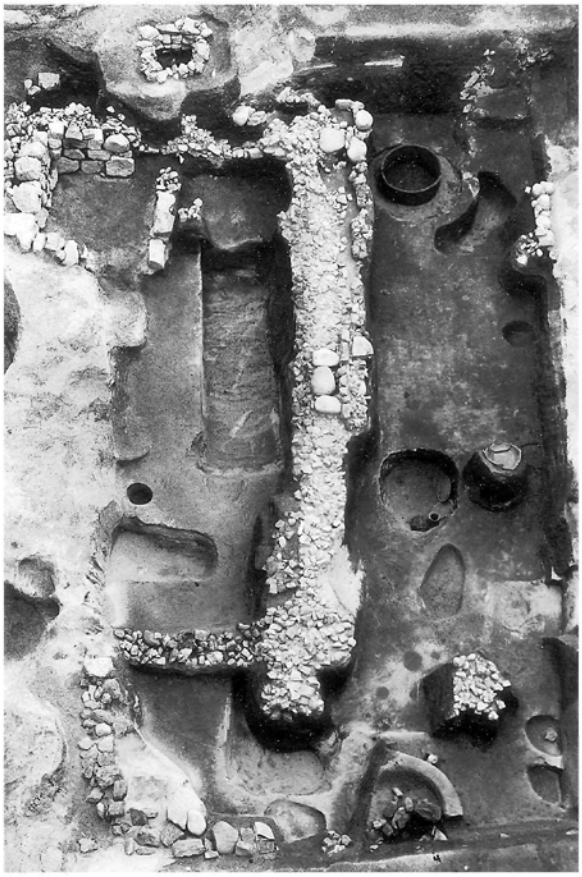


Fig.8　27号建物跡全景（西より）

Fig.9　27号建物跡（東より）

Fig.10　27号建物跡（北より）

Fig.11　27号建物跡（西より）

Fig.12　27号建物跡（東より）

なると考えられる。遺物は基礎石列の溝中や礫に混じって肥前系の青・白磁や陶器の碗・皿のほかに土師器小皿や瓦器・銅銭・土錘などが出土した。

1～14は土師器皿で、口径が6.8～9.6㎝の小皿（1～7・9・10）と口径が9.6～11.4㎝の皿（8・11～14）に大別され、大きめの皿は器高も2～2.5㎝と高い。2は灯明皿に転用され、糸切り後に板目圧痕のほかは糸切り底。15は美濃系の陶器灯明皿。16は15～16世紀代の李朝陶器皿で、口径11㎝、器高は3.6㎝。明橙色の胎土に白灰色の釉薬を施釉。17は三日月高台の肥前灰釉陶器皿で、口径は12.6㎝。見込みに胎土目痕がある。16世紀末～17世紀初。18は17世紀代の陶器小坏で口径は7㎝。19は鉄釉と藁灰釉を掛け分けた小石原窯の陶器碗。17世紀末～18世紀前半。20は灰釉刷毛目陶器碗で、見込みに白泥装飾を施す。21は三日月高台の灰釉陶器皿。22は16世紀代の灰釉陶器皿。23は李朝粉粧沙器

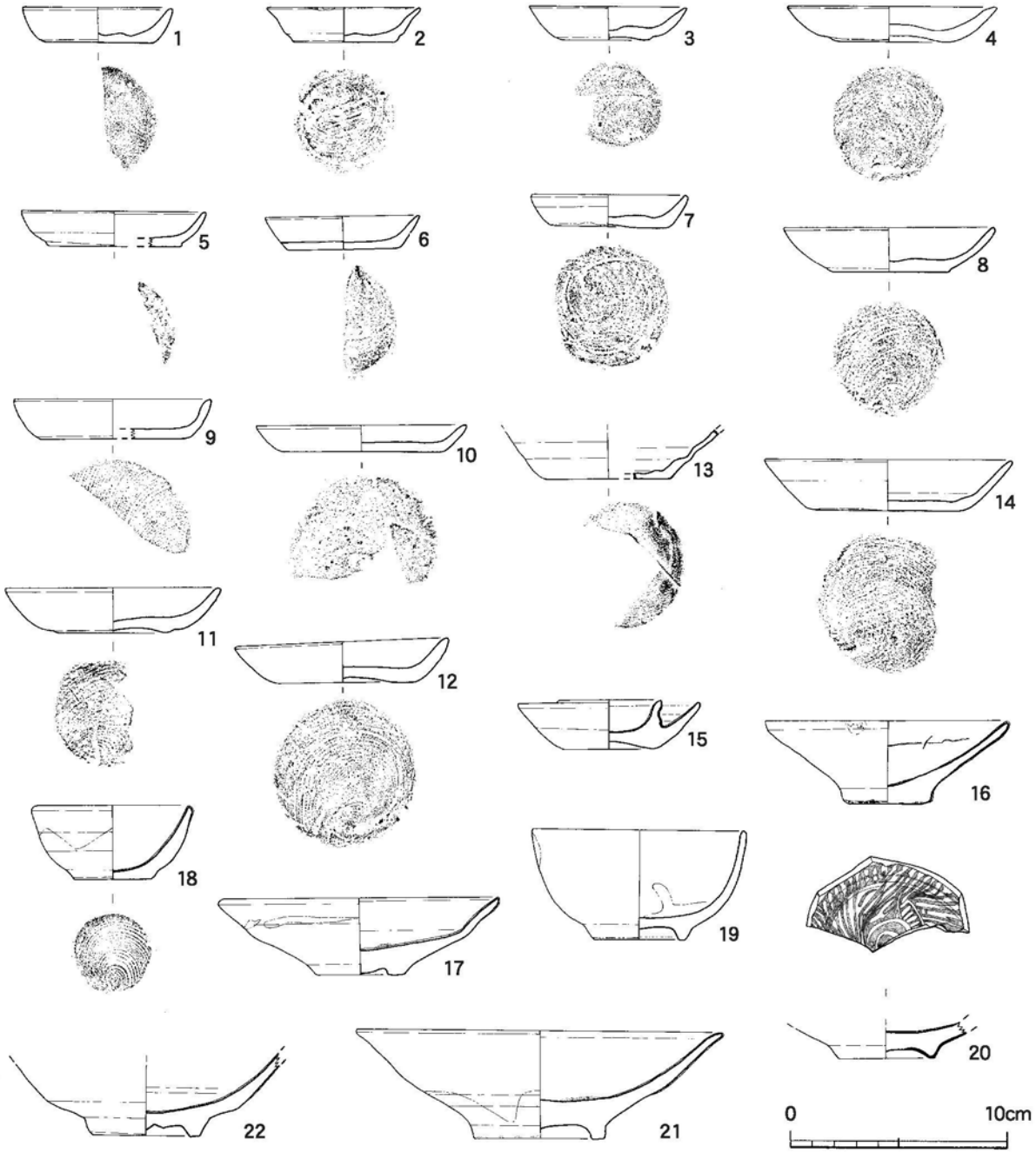


Fig.13　27号建物跡出土遺物実測図1（1／3）

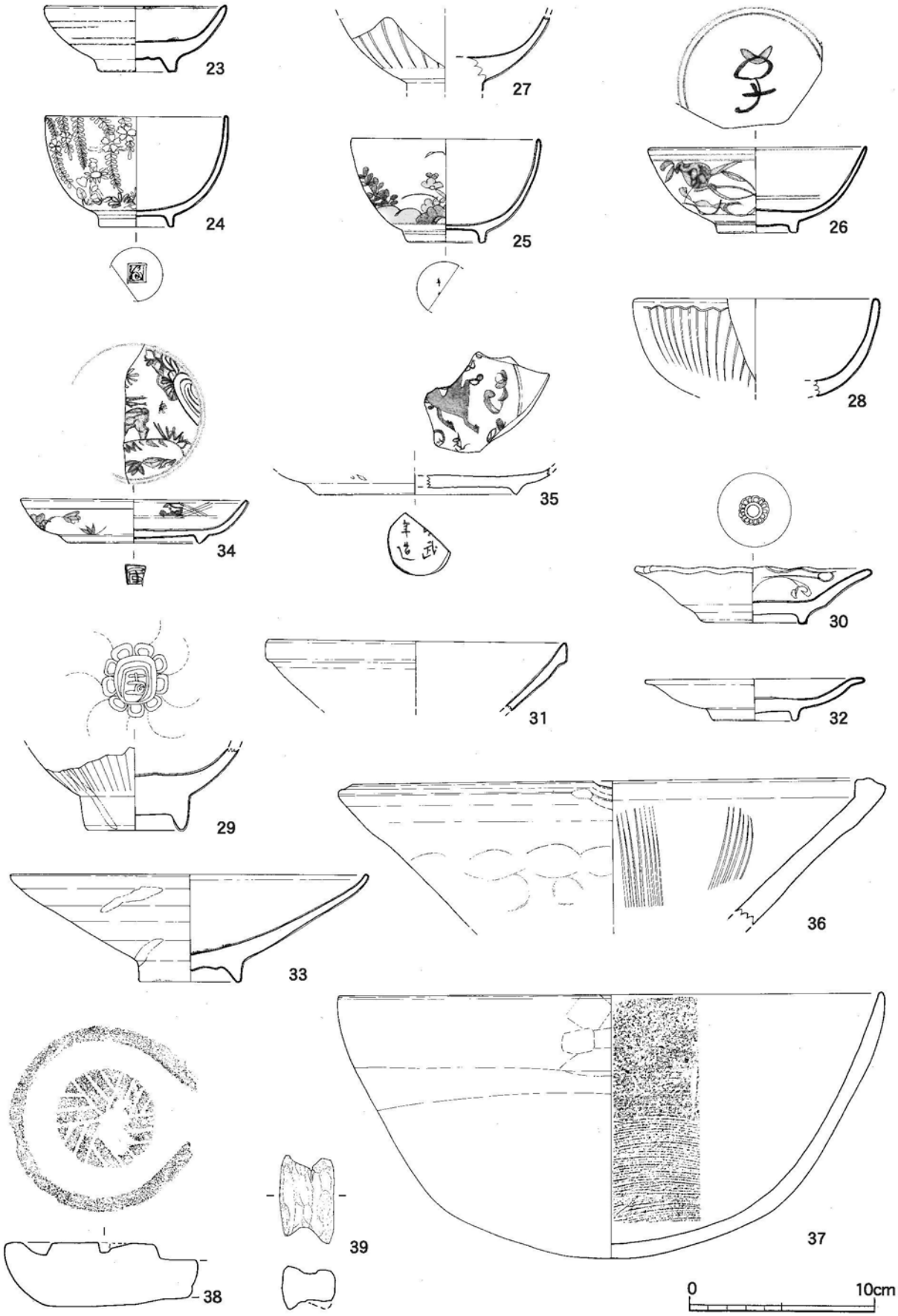


Fig.14　27号建物跡出土遺物実測図２（1／3）

皿で、灯明皿に転用か。24は梅に八つ橋文の波佐見系染付磁器碗で、大明年製の銘がある。17世紀末～18世紀前半。25は藤に草花文の肥前色絵磁器碗。17世紀末。26は16世紀末～17世紀前半の広東系染付磁器碗。27～29は剣先連弁文の龍泉窯系青磁碗。15世紀後半～16世紀初頭。30は淡いオリーブ釉を施釉した越州窯系の輪花文青磁皿で、見込みには陽刻で花文を描く。31は景徳鎮窯Ⅳ類の玉縁口縁の白磁碗。32は蛇の目釉剥ぎの白磁皿で、口径は11.6㎝。高台内に墨書痕がある。33は灰白色の半透明釉を施釉した李朝の白磁皿で見込みに胎土目痕がある。34は景徳鎮窯系の染付皿で、見込みに鳥獣文、体部に唐草文を描く。16世紀末～17初頭。35は染付皿。高台内に洪武年造の銘がある。36は口径29㎝の瓦質の擂鉢。37は口径29㎝、器高が14㎝の土鍋で、外面には煤が付着している。38は砂岩質の茶臼である。39は滑石製の石錘。長さ4.8㎝、幅2.9㎝で中央には結節用の溝がある。88・89は唐草文の軒瓦瓦当である。138は1068年初鋳の「熙寧元寶」、140は「皇宋通寶」、139は無文銭か。147～162は土錘。147・148はMタイプの土錘で、147は長さが5.81㎝、径は2.56㎝、重さは32ｇある。149～162は長さが3.5～4.75㎝、径1.21～1.68㎝、重さが５～11ｇのＳタイプの土錘である。

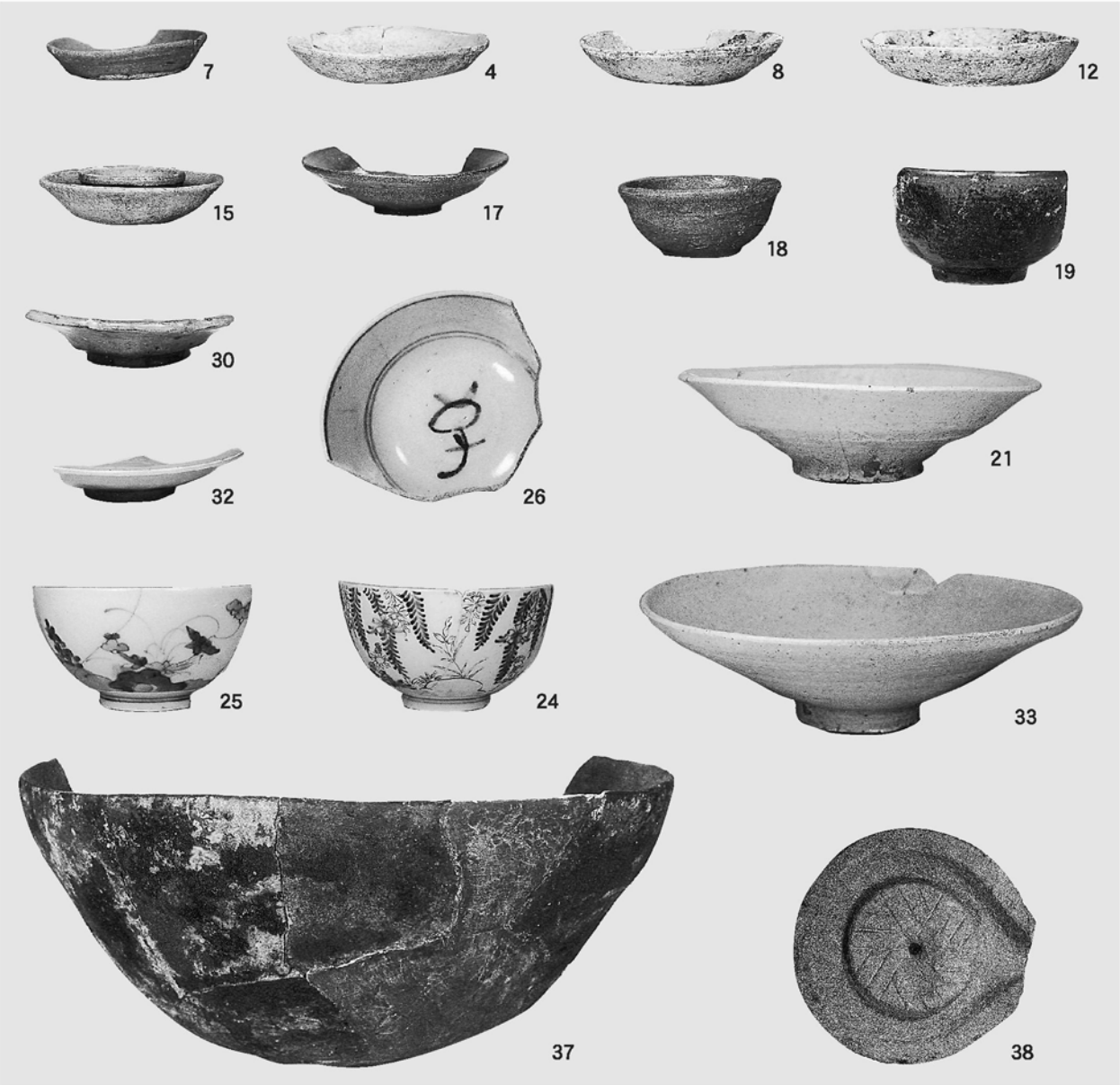


Fig.15　27号建物跡出土遺物（1／3）

4. 井戸跡（SE）

井戸跡はすべてで３基を検出した。このうち２基は平瓦を巻いて井側としたもので、残る１基は未検出であるが、状況的に平瓦巻きとは考え難く、桶か曲げ物を井側とした可能性が想起される。出土する遺物には大差がないが、平瓦巻きの井戸跡が後出すると考えられよう。

Fig.16　３号井戸跡（北より）

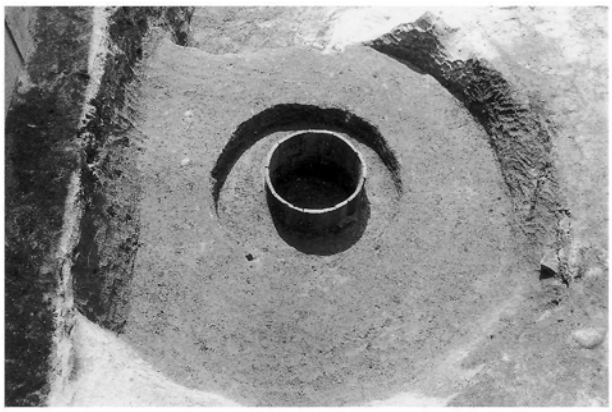


Fig.17　４号井戸跡（北より）

３号井戸跡　SE－03　（Fig.16・18・56）

調査区の北辺に位置する素掘りの井戸で、平面形は直径が320～350㎝の円形プランをなそう。壁面は緩やかに立ち上がり、検出面より200㎝掘り下げたところで壁面が崩落し、完掘りを断念した。この標高1.9ｍの地点で井側は検出されず、状況的に桶か曲げ物を井側とした可能性がある。青磁碗や瓦器片が出土した。

40は口径9.4㎝、器高が5.8㎝の白磁碗である。90は三ツ巴文軒丸瓦の瓦当である。

４号井戸跡　SE－04　（Fig.17・18・22・56）

調査区の北隅に位置する平瓦巻きの井戸で、26号土壙よりも新しい。堀方は直径が370㎝ほどの大きい円形プランを呈し、その中央部に径145㎝を測る２段目の堀方を掘っている。井側はこの２段目の堀方の中央に縦積みの平瓦を73㎝の円形に巻いて積み上げている。未完掘。肥前系磁器碗や土師器皿片が出土した。

41・42は土師器小皿で口径は9.1～9.5㎝。43は18世紀代の肥前染付碗である。口径は11.6㎝、器高は６㎝。体部に草花文、高台内には渦福文を描く。91は８乳の三ツ巴文軒丸瓦の瓦当である。

７号井戸跡　SE－07　（Fig.19～21）

調査区の南東隅部に位置する井戸で、北壁は27号建物跡を、南壁は24号土壙を切っている。井戸は直径が130～143㎝の円形プランを呈し、その堀方の中央に13枚の平瓦を縦積みに78～80㎝の円形に巻いて井側としている。13枚の平瓦のうち２枚は８㎝幅の縦割りにして井側径を保ち、積み上げる毎に位置をずらして均衡を図っている。井側は検出面から４

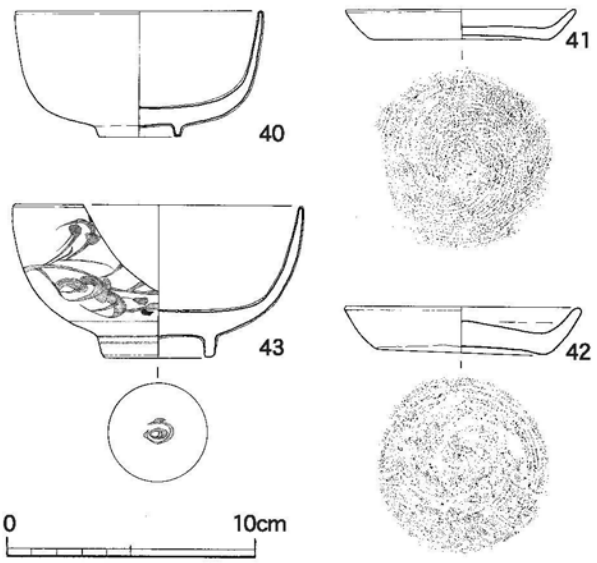


Fig.18　３・４号井戸跡出土遺物実測図（1／3）

段下げたところで完掘を断念した。堀方の壁面は円筒状に急峻に立ち上がる。土師器小皿や瓦器などが出土した。

44は砂岩質の臼である。中央に軸穴があり、その外側に穀物を擦り込む直径２㎝の円孔を穿っている。引き手の挿入痕は外縁にある。163はＳタイプの土錘で、径1.4㎝。

5. 土壙（SK）

土壙は第１面で18基、第２面で３基を検出した。第１面で検出した18基の土壙のうちには炉跡１基と石積土壙２基がある。石積土壙には規模的に大小の違いがあり、そこに機能的な相違が窺える。その何たるかは判然としないが、大型の石積土壙が地下蔵的な機能が想定されよう。プラン的には円～楕円形と方形のものがあるが、円～楕円形のものが多い。また、特筆されるものには21号土壙があり、深い壙底には青銅製品と鉄製品を埋置していた。土壙は基礎石列をもつ建物に隣接して掘られ、且つ青銅製品等は建物に向いて置かれており、密接な繋がりを想起させる。

一方、第２面で検出した３基のうち１基は墓壙としての機能が想起されるが、プラン的には偏向性もなく分布も疎らである。

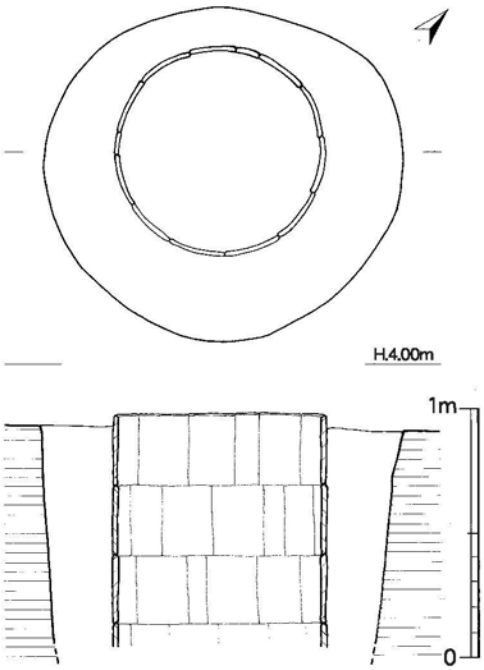


Fig.19　７号井戸跡実測図（1／30）

Fig.20　７号井戸跡（南より）

１号土壙　SK－01　（Fig. 23～25・63）

調査区の西隅に位置する土壙で、東壁は23号土壙を切り、南には２号土壙がある。北小口壁が消失しているが平面形は、短辺が79㎝で、長辺が215㎝ほどの楕円形プランをなす。深さ25㎝の壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は浅い舟底状をなす。覆土は灰褐色～暗灰色砂土の単一層で、炭粒が混入する。壙内からは磁器碗や小坏のほかに陶器碗・鉢などがまとまって出土した。

45は三日月高台の京焼き風肥前陶器碗で、口径9.8㎝、器高5.4㎝。体部には呉須で草花文を描く。17世紀末～18世紀初。46は17世紀前半の肥前陶器壷で鉄釉に緑釉を流し掛けしている。47は陶器の緑釉三足土瓶。胴部上半に緑釉を施釉。18世紀末～19世紀。48～50は肥前系磁器。48は口径が5.2㎝の染付紅皿。体部には草花文を描く。

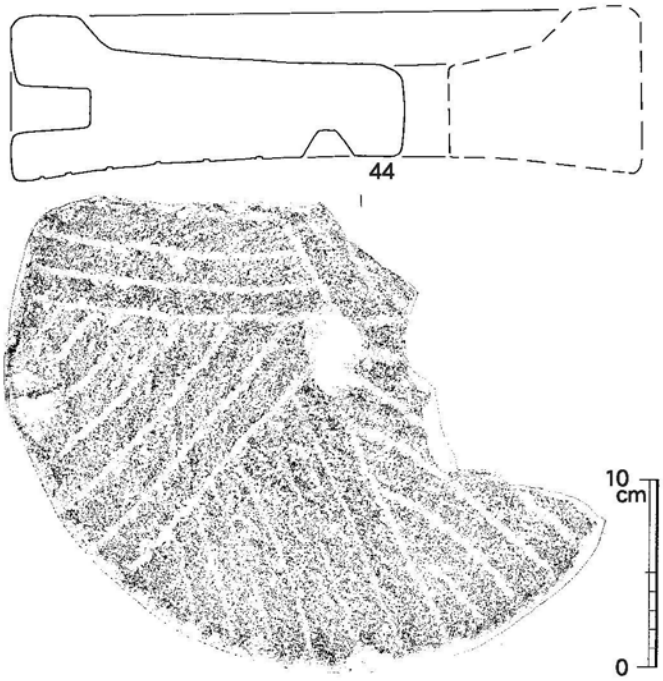


Fig.21　７号井戸跡出土遺物実測図（1／4）

18世紀後半。49は口径9.8㎝、器高が5.6㎝の碗である。見込みには「寿」、体部には蝶に草花文を描く。18世紀。50は口径が11.6㎝、器高が5.8㎝の蓋付碗。体部には圏線上に家紋模様を描く。18世紀末～19世紀。51は体部に草花文、脚部に菖蒲を線刻した瓦質鉢である。

2号土壙　SK－02　(Fig.26～28・63)

調査区の西部に位置する土壙で、北に隣接しては1号土壙がある。平面形は長辺が150㎝、短辺が112㎝の隅丸長方形プランをなす。土壙ははじめに竪穴を掘り、東小口側で35㎝、西小口側が45㎝の深さで壁際に半月形の小さなフラット面を作りだしている。壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。壙底は浅い凹レンズ状をなし、壁高は80㎝。壙底から陶器碗や灯明皿、土師器小皿と骨片が出土した。

52は口径9㎝、器高1.3㎝の土師器小皿。底部は糸切り。53は肥前系灰釉の竹節形陶器鉢で、口径10.4㎝、器高8.5㎝。口縁～見込みには鉄釉、体部には瑠璃釉を施釉する。17世紀後半。

5号土壙　SK－05　(Fig.29～32)

調査区の東部にある小型の石積土壙で、27号建物跡の東壁に接するようにして位置している。石積みは整地層中に長辺が150㎝、短辺が115㎝の隅丸長方形の土壙を掘り、その壙央に長辺が45㎝、短辺が42㎝の方形プランの石積みを築いている。石壁は幅が15～20㎝、厚さが10㎝ほどの角礫を小口壁側に3～4列、側壁側は3～5列横に並べて基壇石としている。次ぎに、この基石上に10～15㎝大のやや小振りの角礫を1段積み重ねる。さらに3～5段目は20～30㎝の大きめの角礫を積み上げて、裏込めには小さな角礫を埋めている。石壁は石面を揃え、隅壁は壁面を挟み込むことなく、接するように連接して積んでいる。基石から上縁石までは13～15㎝外方に拡がり、壁高は45㎝。割られた石臼も石材として用いている。壙底は浅い凹レンズ状をなし、置石などはない。壙内からは土師器小皿や瓦器片が出土した。

6号土壙　SK－06　(Fig.33～36・56・63)

調査区の北部に位置する石積土壙で、東西壁の南隅壁は消失している。石積土壙は27号建物跡の基礎石列の北東隅部に取り込まれるように位置しており、27号建物跡と一体化した施設の趣があるが、桁行側の基礎石列を削平しており、27号建物跡より新しい。内法は東西長が140㎝、南北長が135㎝の方形プランを呈する

Fig.22　4号井戸跡出土遺物（1／3）

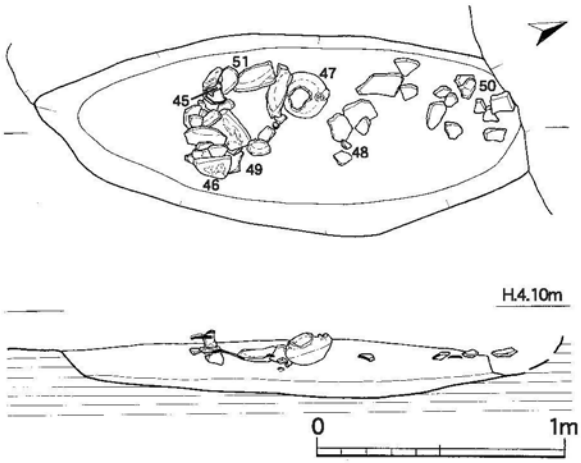


Fig.23　1号土壙実測図（1／30）

Fig.24　1号土壙（南より）

が、東壁は南へ10cmほど撥形に開く。石壁は幅30～50cm、厚さ15～20cmの角礫を横位にして基底面に揃えて据え、その上面に同程度の転石を布積み状に２～４段積み上げている。北壁と東西壁の隅壁は重複することなく、両壁側から接するように連接して積んでいる。壁面は石面を揃えて丁寧に積み上げている。北壁は西から東へ低くなり、基底面の比高差は20cm。壁高は90cm。壙底は浅い凹レンズ状をなす。壙内からは肥前系の近世磁器坏や皿片のほかに土師器小皿、瓦器などが出土している。

54～57は土師器小皿で、口径が6.6～７cmのもの（54・55）と8.8～9.6cmのもの（56・57）があり、底部は糸切り。58～60は三日月高台の肥前灰釉陶器皿で、**58**は16世紀末～17世紀初、**59・60**は16世紀初。胎土目積の目砂が銹着し、緑釉を施釉する。**61・62**は景徳鎮窯の染付磁器皿。**61**は高台径が９cmで、見込みに玉取獅子文を描く。16世紀前葉～中葉。**62**は口径13.2cm、器高が2.8cm。見込みには２本の圏線と寿を描く。16世紀末～17世紀初。**63**は17世紀中葉の肥前磁器小坏で、口径が6.8cm、器高が3.9cm。**92**は三ツ巴文軒丸瓦の瓦当である。165はＳタイプの土錘で長さ3.89cm、径1.15cm、重さは５ｇ。

８号土壙　SK－08　（Fig.37・38）

８号土壙は調査区の南西縁に位置する石組炉で、すぐ北には27号建物跡の南礎石列が接している。西壁が調査区外に拡がるが、平面形は短辺が95cm、長辺が125cmほどの楕円形プランをなそう。深さ40cmの壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は浅い舟底状を呈する。壁面に沿って拳大～人頭大の円礫や角礫を立て並べており、その石面は被熱による赤変が顕著である。覆土は暗褐色砂土で、石組内に限って焼土塊や炭片の堆積が観察された。

164はＳタイプの土錘で、長さ4.64cm、径1.64cm、重さは10ｇ。

９号土壙　SK－09　（Fig.39・41）

９号土壙は調査区の南辺に位置し、西壁は21号土壙を、南壁は12号土壙を切っている。平面形は、直径が137cmの円形プランを呈する。土壙ははじめに検出面より－60～75cmの深さまで掘り、西壁に沿ってさらに30cmほど掘り下げた、いわゆる２段掘りの構造で東壁側には三日月状のフラット面が付く。壁面は緩やかに立ち上がり、壙底までの深さは100cm。断面形は逆台形をなす。遺物は土師皿片

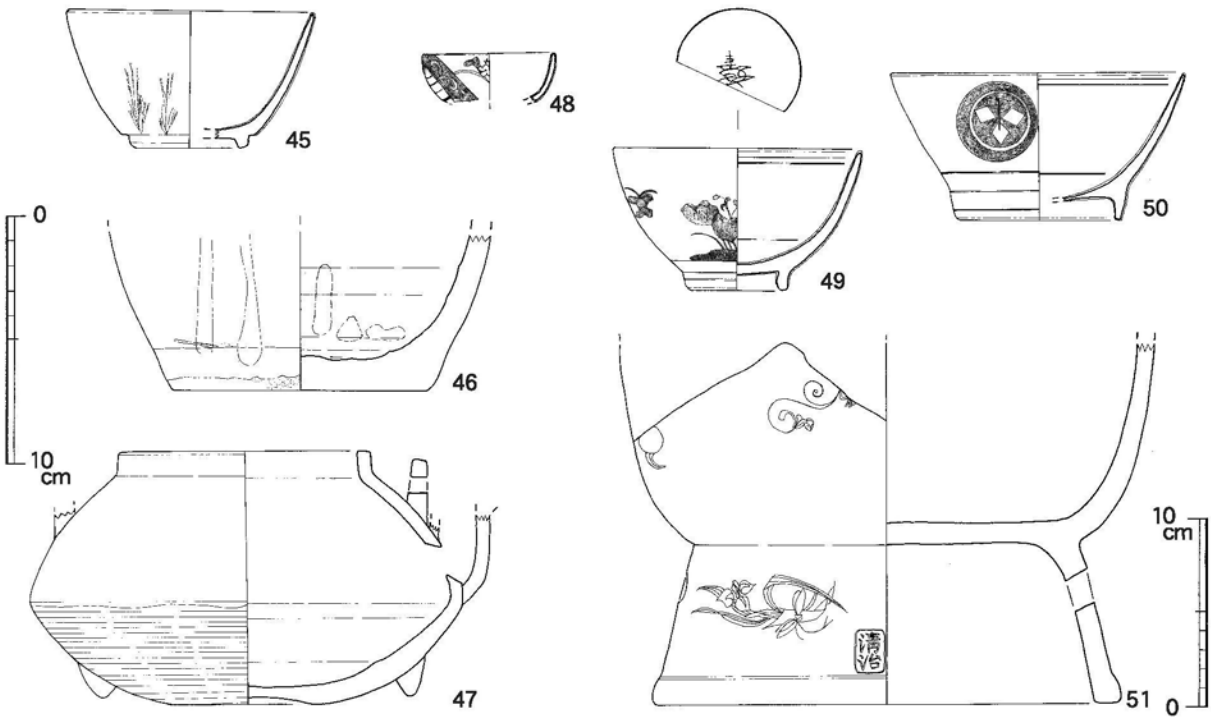


Fig.25　１号土壙出土遺物実測図（1／3・1／4）

や瓦器のほかに土鈴が出土した。

141は銅銭で、銘は判読できない。

10号土壙　SK－10　(Fig. 40・41)

調査区の南隅に位置する大型の土壙で、すぐ北には12号土壙や21号土壙が隣接している。平面形は220～250㎝の円形プランをなし、壁高は43㎝。壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は賀や区台形状をなす。壙底は凹レンズ状に窪む。土師器小皿や瓦器鉢片、土錘が出土した。

168はＳタイプの土錘で長さ4.37㎝、径1.46㎝、重さは８ｇ。

11号土壙　SK－11　(Fig. 42)

調査区中央部の南辺に位置する小土壙で、南には９号土壙が隣接している。平面形は長辺が92㎝、短辺が50㎝の不整な楕円形プランを呈する。壁高は５～７㎝と浅く、覆土は黄褐色粘土塊と焼土・炭片が混入した灰褐色土で、土師器小皿と陶器甕片が出土した。

12号土壙　SK－12　(Fig. 43～45)

調査区の南部にある埋甕土壙で、北壁は９号土壙に大きく削平されている。平面形は一辺が63～70㎝ほどの円形プランをなし、壁面はやや急峻に立ち上がる。この壁面に沿って陶器甕をほぼ水平に埋置している。甕内には破損した甕片が転入していたが、銅銭等の副葬品と思しき遺物は検出されなかった。状況的に近世墓の可能性が想起されるが即断はできない。20号土壙からもこの甕と同じ形状の埋甕が検出されている。

64は大型の陶器甕で、上げ底の底部は底径が29㎝。タタキ後にナデ調整し、濃い飴色の鉄釉をかける。

13号土壙　SK－13　(Fig. 46・55・63)

調査区の南西隅にある楕円形プランの小土壙で、南壁は14号土壙に削平されている。壁面はやや緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形をなす。壁高は20㎝。覆土は暗灰茶褐色砂土で、肥前系磁器や陶器の碗・皿が出土した。

69は美濃系の藁灰釉陶器碗で、口径11.4㎝、器高は6.9㎝。体部下半には釉溜まりがある。16世紀末。

14号土壙　ＳＫ－14　(Fig. 46)

調査区の南西隅にあり、北壁は13号土壙の南壁を切っている。平面形は調査区外にあるため明らかでないが、直径が２ｍ

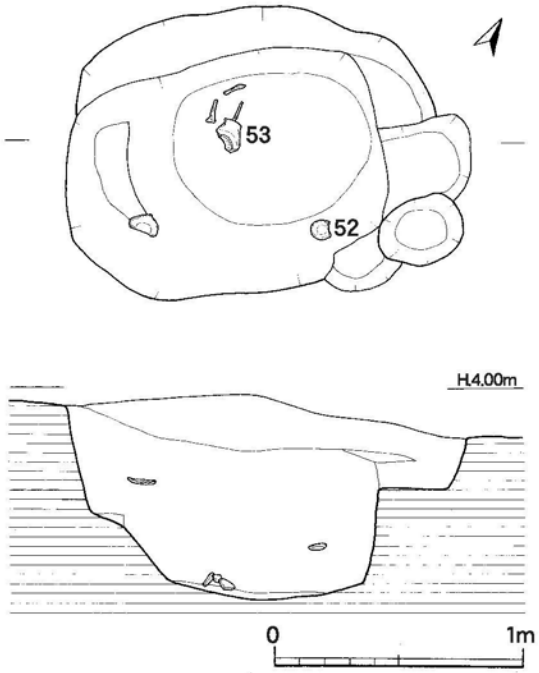


Fig.26　２号土壙実測図（1／30）

Fig.27　２号土壙（西より）

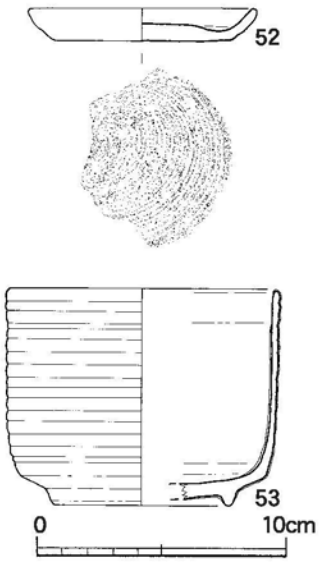


Fig.28　２号土壙出土遺物実測図（1／3）

ほどの円形プランになろうか。壁面は緩やかに立ち上がり、北壁側にフラット面を壙央は１段低くなるいわゆる２段掘りの構造をなす。覆土は黒茶褐色砂土で土師器小皿と瓦片が出土した。

70・71は糸切り底の土師器小皿で口径は７～7.4㎝。**71**は灯明皿に転用。**72**は鉄釉陶器の仏飯具で、口径7.6㎝。**73**は18世紀後半の肥前白磁猪口。**167**はＳタイプの土錘で長さ4.46㎝、径1.52㎝、重さは10ｇ。

16号土壙　SK－16

（Fig.47・48）

調査区の西部、27号建物跡の基礎したにある土壙で、下層面（第２面）の遺構である。北小口壁が消失しているが、平面形は長辺が160㎝、短辺が70㎝の長方形プランをなす。深さが30～35㎝の壁面は、小口壁がやや緩やかに、側壁がやや急峻に立ち上がる。壙底は浅い凹レンズ状をなし、断面形は浅い舟底状をなす。形状的に墓壙の可能性が想起される。

19号土壙　SK－19

（Fig.5・55）

調査区の西隅にあり、20号土壙よりも新しく、楕円形プランにな

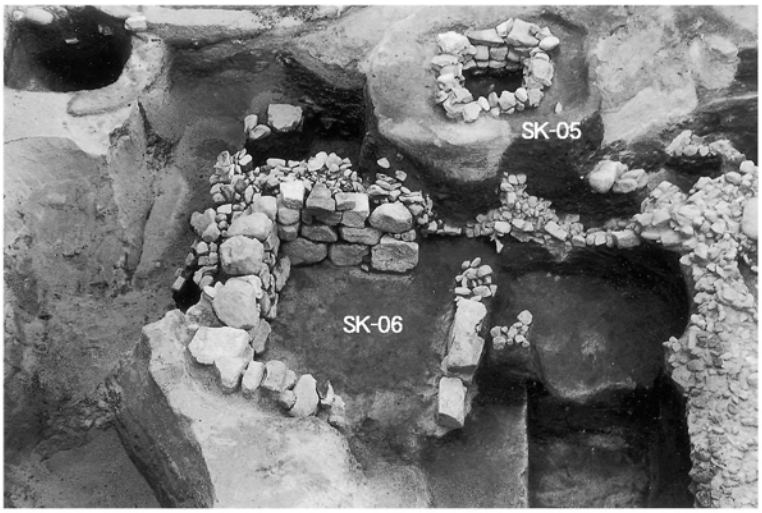


Fig.29　５・６号土壙（西より）

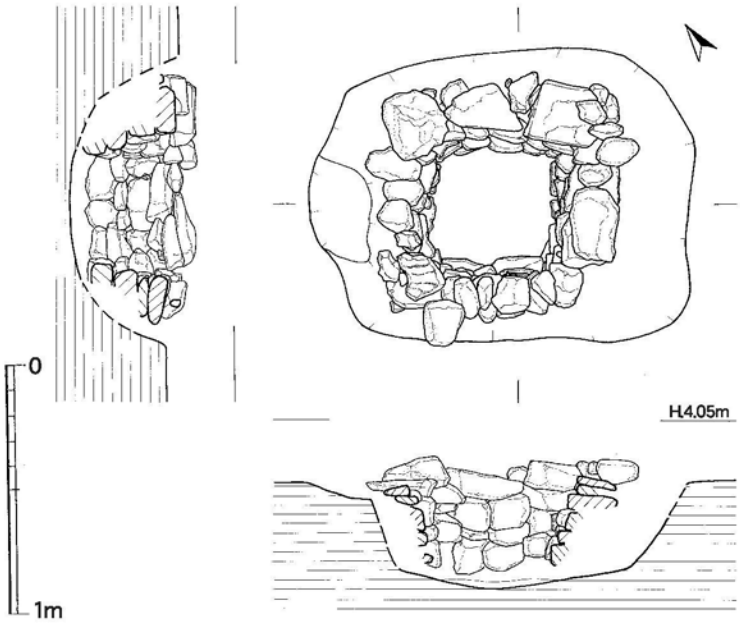


Fig.30　５号土壙実測図（1／30）

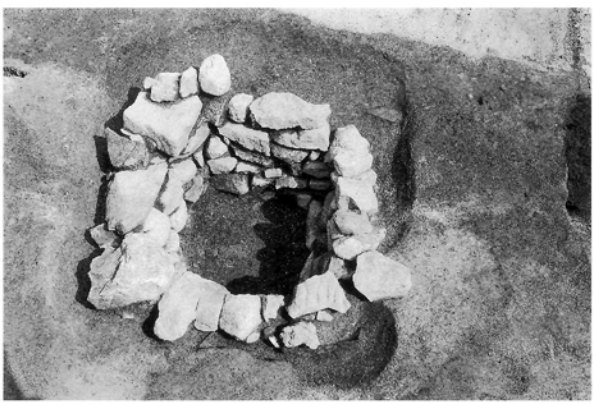


Fig.31　５号土壙（北より）

Fig.32　５号土壙南北断面（西より）

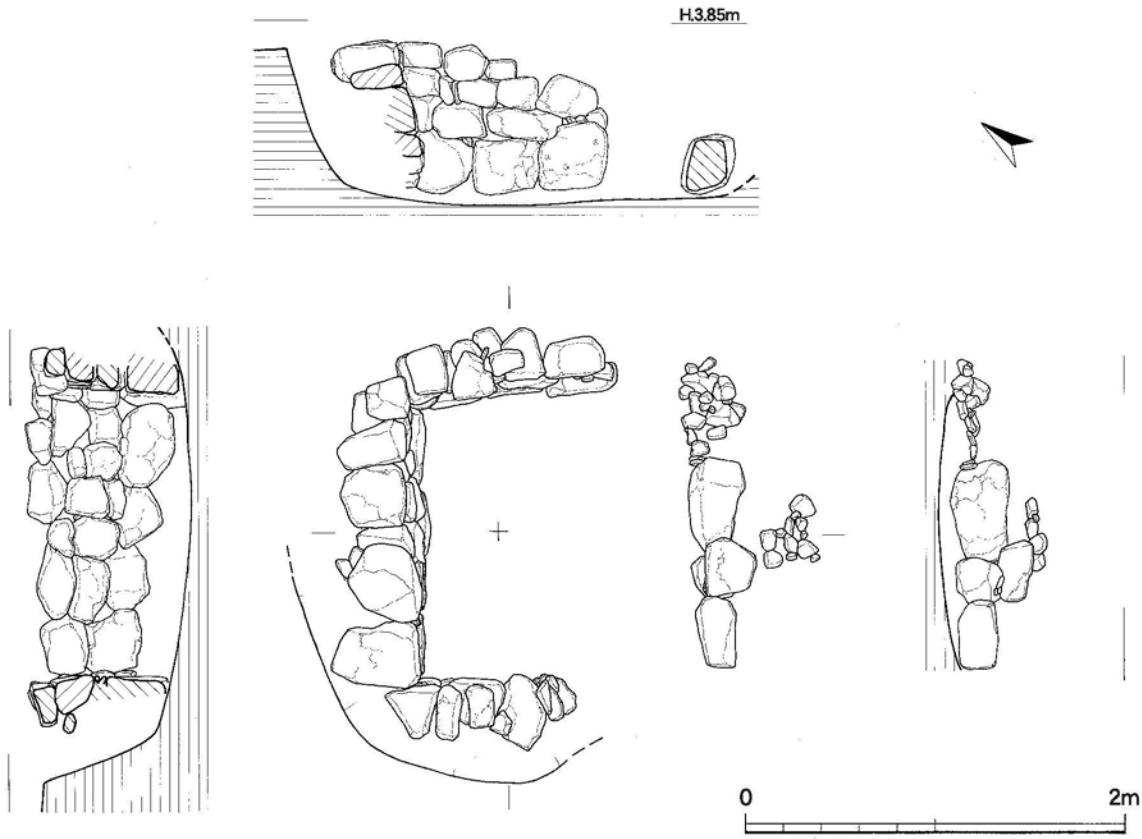


Fig.33　6号土壙実測図（1／40）

ろうか。陶磁器の甕や碗が出土した。

74は口径15.8㎝、器高が2.4㎝の土師器皿である。

20号土壙　SK－20（Fig.5・55）

調査区の西隅にある方形プランの土壙で、西壁は19号土壙に切られている。壙内には人頭大～50㎝大の転石と陶器甕が埋め甕状に埋置されていた。陶器や瓦器片が出土。

75・76は口径が6～6.8㎝の土師器小皿。77～79は口径が12～15㎝の土師器皿で、77・78は板目痕、79は糸切り底。80は李朝の灰釉陶器皿で、口径11㎝、器高が3.6㎝。見込みと高台内に4ヶの胎土目痕がある。15～16世紀代。

21号土壙　SK－21

（Fig.49～54・巻頭図版）

調査区の南部にあり、東壁は9号土壙に切られて消失している。平面形は長辺が120㎝、短辺が103㎝のやや不整な円形プランを呈し、西壁はコブ状に小さく突き出ている。壁面は不整な西壁が緩やかに立ち上がるほかは箱形

Fig.34　6号土壙（南より）

Fig.35　6号土壙南北断面（西より）

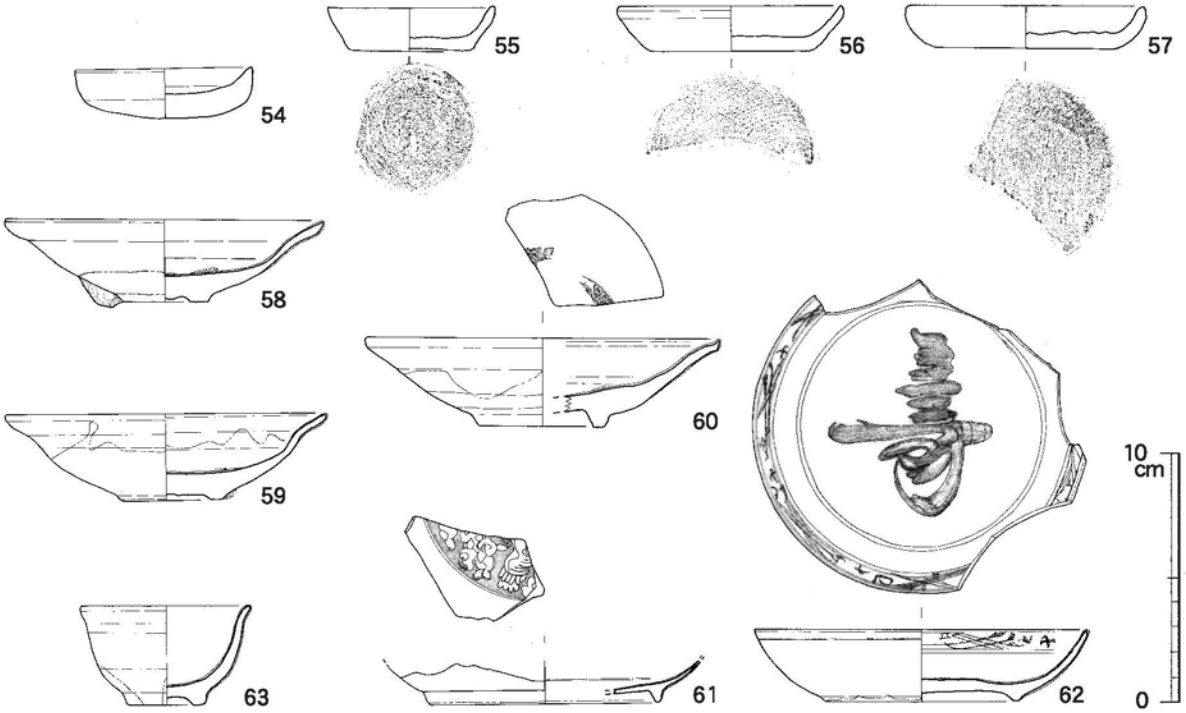


Fig.36　6号土壙出土遺物実測図（1／3）

になる。壁高は75㎝であるが、本来は基礎石列面より掘り込まれていることから170㎝の深さである。壙底は浅い凹レンズ状をなし、この南壁に沿って銅盤と銅盥、銅瓶を立て並べ、西壁際には鉄壷を伏せて埋置していた。銅盤や銅瓶は基礎石列の方に向けるように並べられている。また、土壙の上層には30～40㎝の厚さで、焼土塊と炭粒の混入層が凹レンズ状に堆積していた。基礎石列を向いた銅盤や銅瓶と焼土の互層は、焼けて赤変した建物の基礎石列との繋がりを想起させるものがある。壙内からは銅製品のほかに陶磁器の鉢や碗と瓦器甕、土錘が出土した。65は口径16.2㎝、高台径10㎝、器高が19.2㎝の青銅製花瓶。頸部～口縁部は大きくラッパ状に外反し、体部には花文と雷文の浮文を交互に配している。器壁は１～2.5ｍｍときわめて薄い。高台内には繊維様の付着物がある。66・67は青銅製盤である。67は口径が36㎝、器高は5.6㎝。大きく水平に折り曲げた口縁部は外縁に凸帯状の縁が巡り、底部には低い高台がある。67は口径36㎝、器高は5.6㎝で、高台高は2.9㎝と高い。体部は小さく内弯し、口縁部は短く外方に摘み出す。器壁はきわめて薄い。68は鉄製壷で、銹化が著しい。168はＳタイプの土錘で、重さは10ｇ。

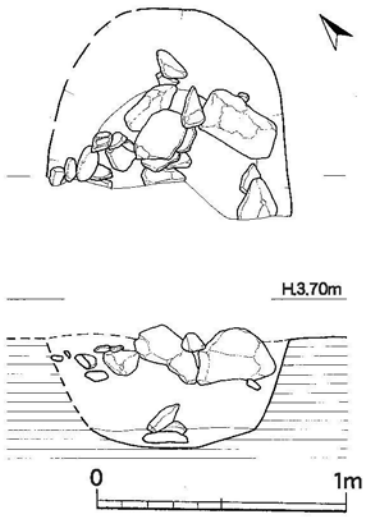


Fig.37　8号土壙実測図（1／30）

23号土壙　SK－23　（Fig.5・56）

調査区の北西部にある長方形プランの土壙で、北壁は３号井戸や１号土壙に切られてい

Fig.38　8号土壙（西より）

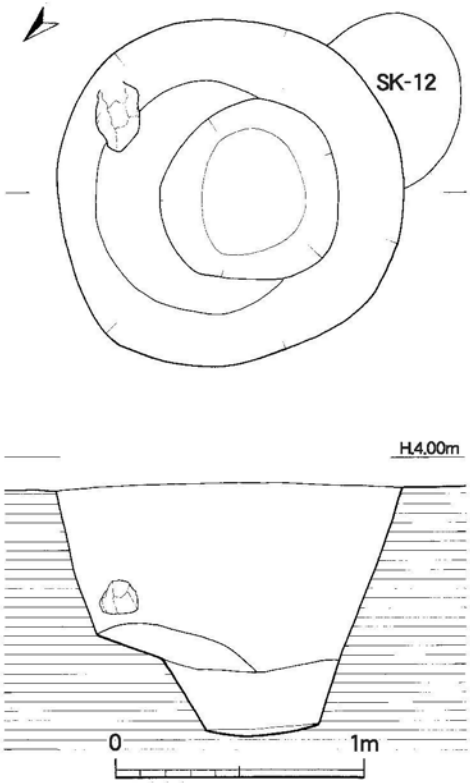


Fig.39　9号土壙実測図（1／30）

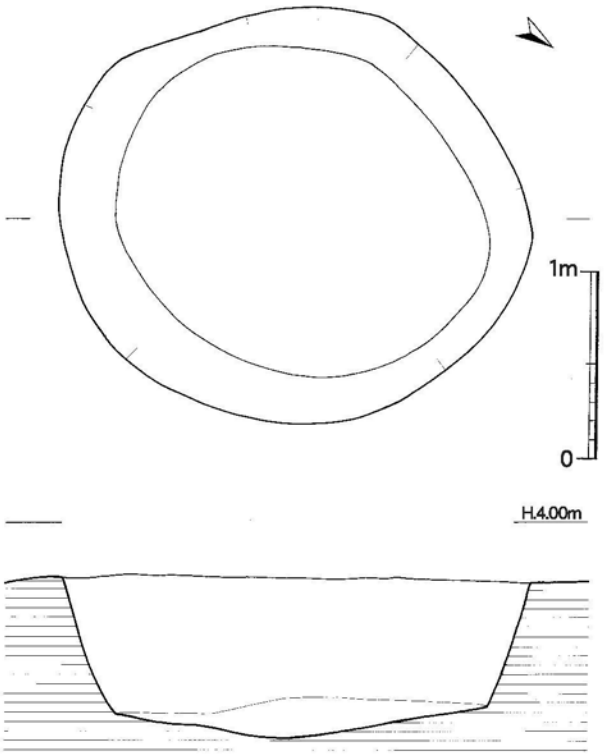


Fig.40　10号土壙実測図（1／40）

る。短辺は185㎝。壁面は緩やかに立ち上がり、壙底は南へ向かって低くなる。壁高は25～40㎝。陶磁器の甕や碗・皿が出土した。

81は口径が13.6㎝の肥前灰釉皿で、17世紀前葉の所産。

24号土壙　SK－24　（Fig.5・56）

調査区の南東部にあり、北壁は7号井戸に削平されている。平面形は長辺が145㎝、短辺が120㎝の方形プランを呈するが、東小口壁は短く台形状をなす。深さ50㎝の壁面は緩やかに立ち上がるが、西壁側には小さな三日月状のフラット面を作る。磁器碗や瓦器が出土した。

82は16世紀末～17世紀初の灰釉陶器皿である。見込みと高台に胎土目痕がある。

25号土壙　SK－25　（Fig.5・56・63）

調査区の北縁にある楕円形プランの土壙で、西壁は3号井戸で削平されている。壁面は緩やかに立ち上がり、壁高は90㎝を測る。陶器碗や土師器・瓦質土器が出土した。

83は糸切り底の土師器小皿で、口径は7㎝。84は18世紀代の藁灰釉陶器で、口径は10.2㎝。

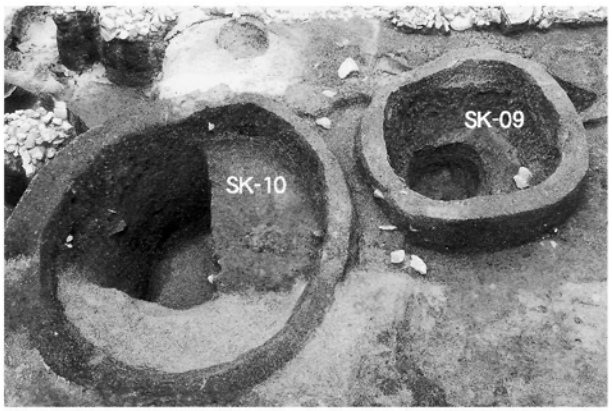


Fig.41　9・10号土壙（南より）

Fig.42　11号土壙（南より）

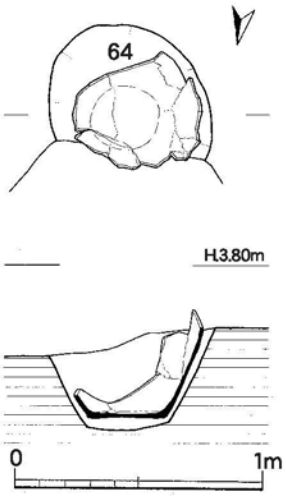


Fig.43　12号土壙実測図（1／30）

Fig.44　12号土壙（東より）

小石原焼か。85は型押成形の肥前染付水滴で、18世紀後半～19世紀前半。

26号土壙　SK－26　（Fig. 5・56・63）

調査区の北隅にあり、東壁は４号井戸跡に削平されている。平面形は一辺が170cmほどの方形プランをなそう。西壁は検出面より35cmの深さに狭いフラット面を作り、緩やかに傾斜して壙底に至る。南壁はややオーバーハングぎみに内傾している。肥前系の磁器碗や土師器小皿が出土した。

86は口径が10cmの土師器小皿。87は18世紀前半の肥前磁器の染付仏飯具。高台内には目砂が付着している。93は三ツ巴文軒丸瓦の瓦当である。

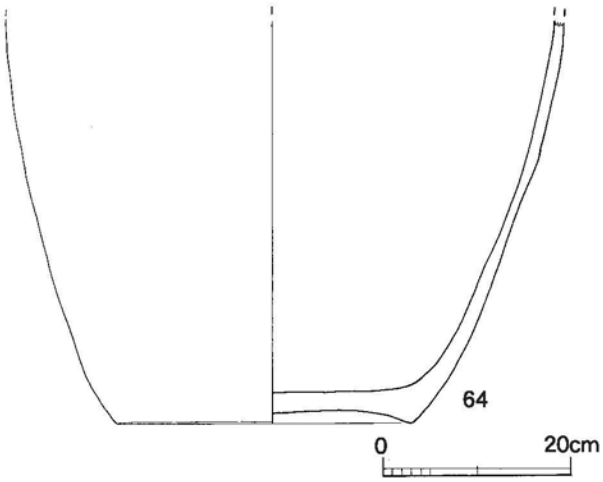


Fig.45　12号土壙出土遺物実測図（1／8）

6. 包含層出土の遺物
(Fig. 56・59～62・64・65)

建物跡や土壙のほかにピットがあり、その覆土中からも遺物が出土している。また、第１面の遺構が掘り込まれている整地層やその上面には薄い遺物包含層があり、その層中と近代の撹乱壙内からも近世の陶磁器や土製品・石製品などが出土している。

94～96は三ツ巴文の軒丸瓦瓦当、97～99は唐草文軒平瓦の瓦当である。

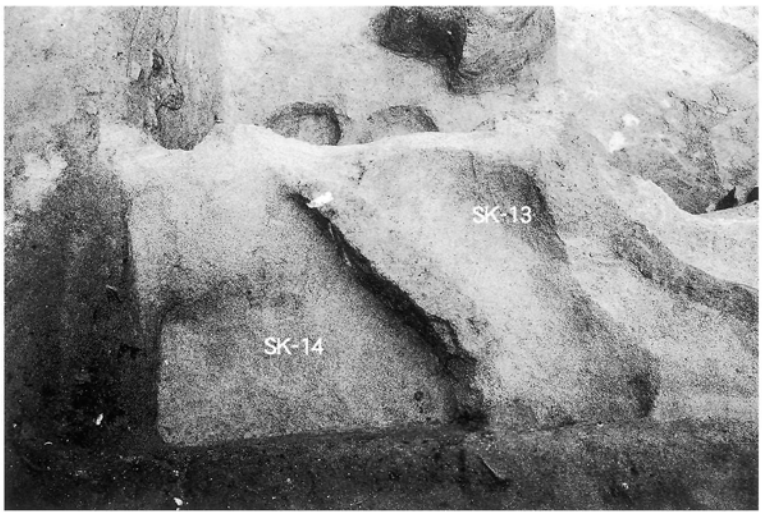


Fig.46　13・14号土壙（南より）

100～107は撹乱壙から出土した。100は糸切り底の土師器小皿で、口径が7㎝、器高は1.4㎝である。101は肥前磁器の染付蓋で、口径は9.6㎝、器高は3.1㎝。18～19世紀前半。102は18世紀代の染付磁器碗で、口径は9.2㎝、器高は5.8㎝。高台畳付は釉剥ぎで、目砂が付着している。103は18世紀代の肥前磁器染付皿である。見込みには草花文を描く。蛇の目凹形高台は蛇の目の釉剥ぎで、銘がある。104は口径が13.4㎝を測る瓦器の壷である。調整は内面がハケ目後にナデ、外面はナデ。外面には煤が付着している。105は口径が14㎝を測る瓦質の茶釜である。口縁部は短く内傾し、肩部には一対の把手が付く。調整は口縁部が丁寧なヘラ研磨、内面はハケ目後にナデ。106は瓦質茶釜の胴部下半で、端部を下方に摘み出した鍔が付く。その鍔下には、刻目を施文した1条の低い凸帯が付く。凸帯より下はタテ～ヨコ方向の粗いハケ目で、煤が付着している。105と106は同一個体と考えられる。107は口径が24㎝、器高が11.8㎝の土鍋である。半球形の体部はストレートに外反する。調整は体部上半は押圧ナデ、下半は粗いタテ～ナナメのハケ目。内面はナナメ～タテ方向のハケ目。外面は煤の付着が著しい。

108～136は遺物包含層より出土したものである。

108～110は糸切り底の土師器小皿である。108・110の体部はストレートに立ち上がり、109は内弯ぎみに立ち上がる。108は口径9㎝、器高は1.5㎝。109は口径が8.2㎝、器高は1.3㎝。110は口径9㎝、器高は

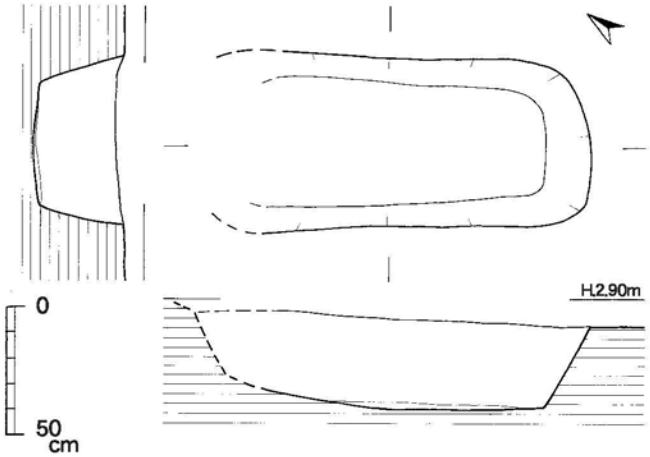


Fig.47　16号土壙実測図（1／30）

Fig.48　16号土壙（西より）

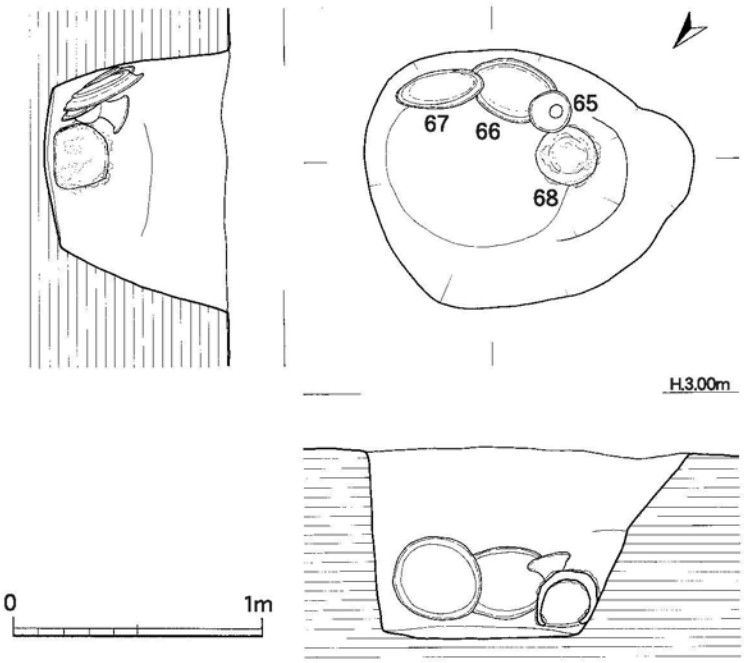


Fig.49　21号土壙実測図（1／30）

1.1㎝。111は小石原窯の陶器碗である。鉄釉の上に黄色や緑銅色の釉薬を流し掛けしている。高台畳付は釉剥ぎ。口径9.8㎝、器高は5.4㎝。17世紀末～18世紀前半の所産。112は全面に黒釉を塗布した小坏で、口径は5㎝、器高は3.1㎝を測る。高台内に「備前」銘の刻印がある。113は口径7.6㎝、器高が3.5㎝を測る陶器の灰釉小坏である。体部外面は無釉で、煤が付着している。底部は糸切り。114は口径が13.8㎝、器高が3.4㎝を測る肥前陶器の溝縁灰釉皿で17世紀前葉のもの。体部下半は無釉で、見込みと兜巾の三日月高台には目砂が4ヶ所に残る。115は肥前陶器の輪花形溝縁灰釉皿で、口径は13.8㎝、器高は3.4㎝を測る。溝縁の口縁部は輪花形をなし、体部下半は無釉。兜巾の三日月高台と見込みには目砂が4ヶ所に残る。17世紀前葉の所産。116は糸切り底の陶器瓶である。鉄釉の上から銅緑釉を施釉するが、底部は無釉である。小石原窯か。117は口径が8.2㎝、器高が3㎝の白磁小坏で、全体に透明釉を施釉している。118は備前系骨壺と共にF－7区から出土した白磁碗である。口径は9.8㎝、器高は5.7㎝を測る。透明釉には貫入があ

Fig.50　21号土壙土層断面（東より）

Fig.51　21号土壙（東より）

Fig.52　21号土壙遺物出土状況（北より）

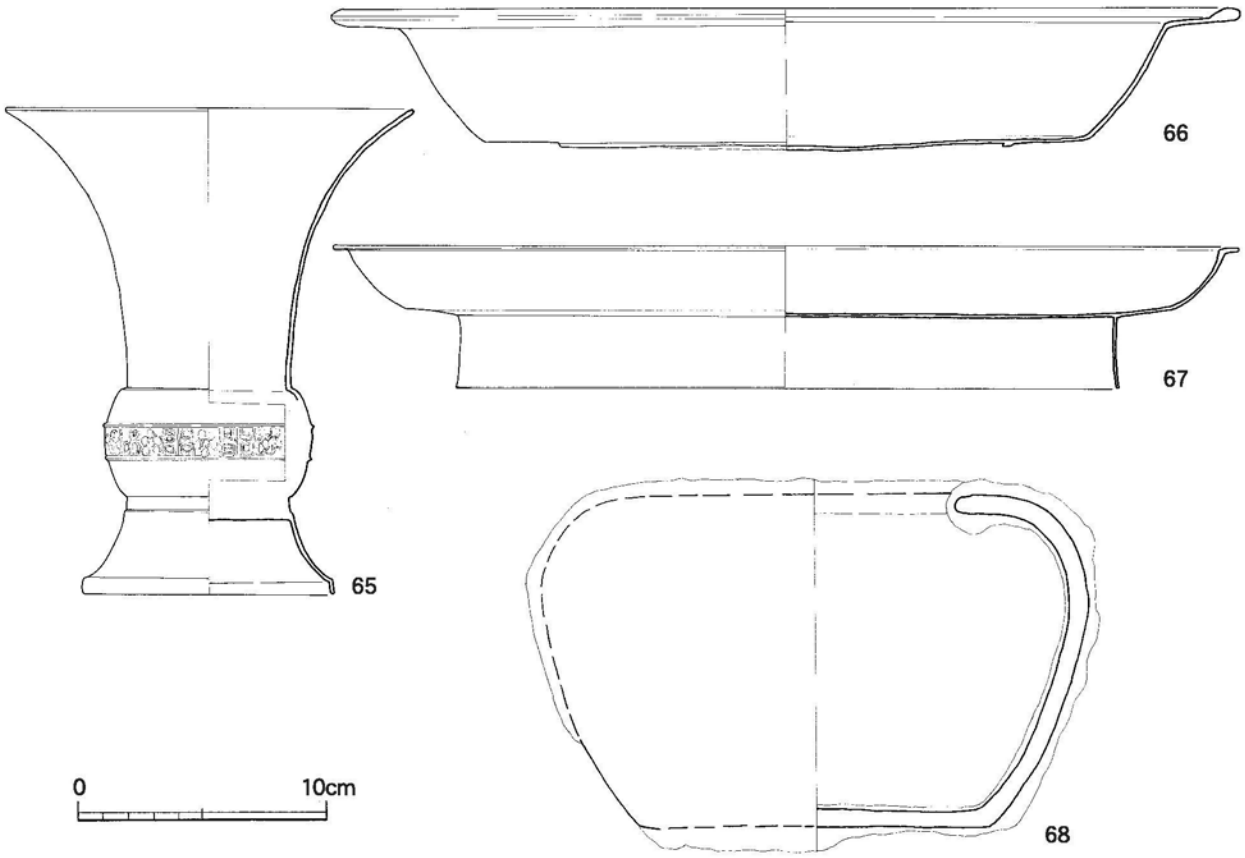


Fig.53　21号土壙出土遺物実測図（1／3）

Fig.54　21号土壙出土遺物（1／4）

り、高台は無釉。119は波佐見窯の染付磁器碗である。口径は9.8㎝、器高は5.3㎝を測る。体部には梅に八つ橋文を描く。畳付は釉剥ぎで、高台には２本の圏線と大明年製の変形銘である「め」の文字がある。18世紀中葉～末のもの。120は18世紀代の肥前磁器染付碗である。口径は9.6㎝、器高は5.2㎝を測る。高台に２本の圏線と体部には山文を呉須で描いている。121はＦ－７区から陶器骨壺とともに出土した灰釉の磁器皿である。口径は13.8㎝、器高は４㎝を測る。兜巾の三日月高台は無釉で、見込みには４ヶ所に目砂が残る。口縁部には油煙痕があり、灯明皿として転用したものである。

122は口径が12.4㎝、器高が3.5㎝を測る波佐見窯の染付磁器皿である。見込みは蛇の目の釉剥ぎで、二重圏線に草文を呉須で描いている。高台畳付は釉剥ぎで、砂目が付着している。123は18世紀代の肥前波佐見窯の輪花形青磁皿である。蛇の目凹形高台は、蛇の目の釉剥ぎで、口径は13㎝、器高は3.1㎝を測る。124は肥前樋口窯の染付皿である。見込みにはコンニャク印判で五弁花文を、高台内には二重方形枠内に「渦福」銘を描いている。高台畳付は釉剥ぎ。17世紀末～18世紀初頭のものである。125は口径が4.4㎝、器高が1.5㎝の肥前白磁の紅皿である。貝文を模倣した押型成形で、体部下半は無釉。17世紀末～18世紀のもの。126・127はＦ－７区から陶器壺とともに出土した灯明皿である。126は口径６㎝、器高が3.6㎝の陶器製灯明皿である。内皿は短くストレートに立ち上がる。鉄釉を皿の内面に施釉している。127は土師質の灯明皿で、口径は６㎝、器高は5.2㎝を測る。内皿は伸びやかに

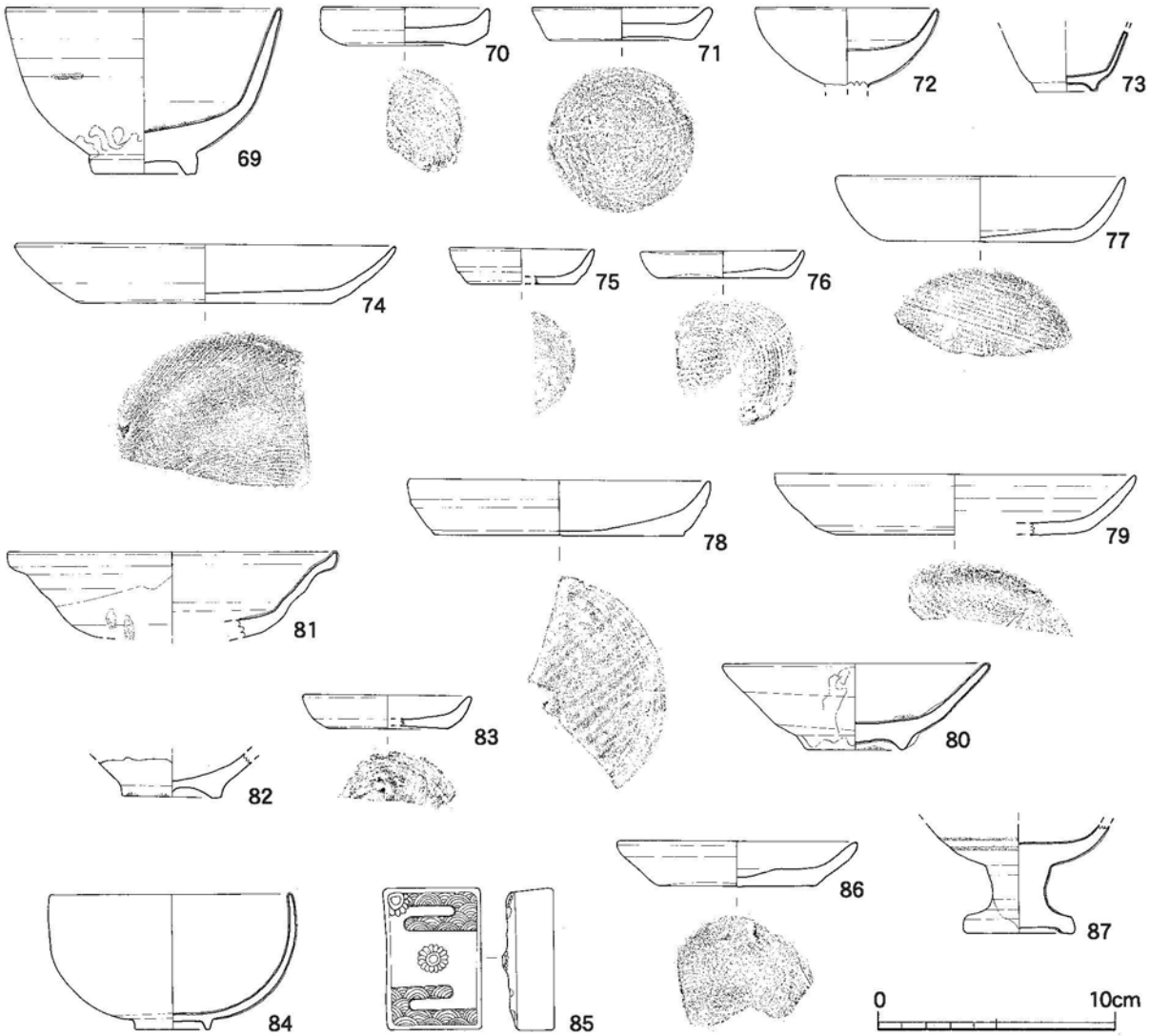


Fig.55　土壙出土遺物実測図（1／3）

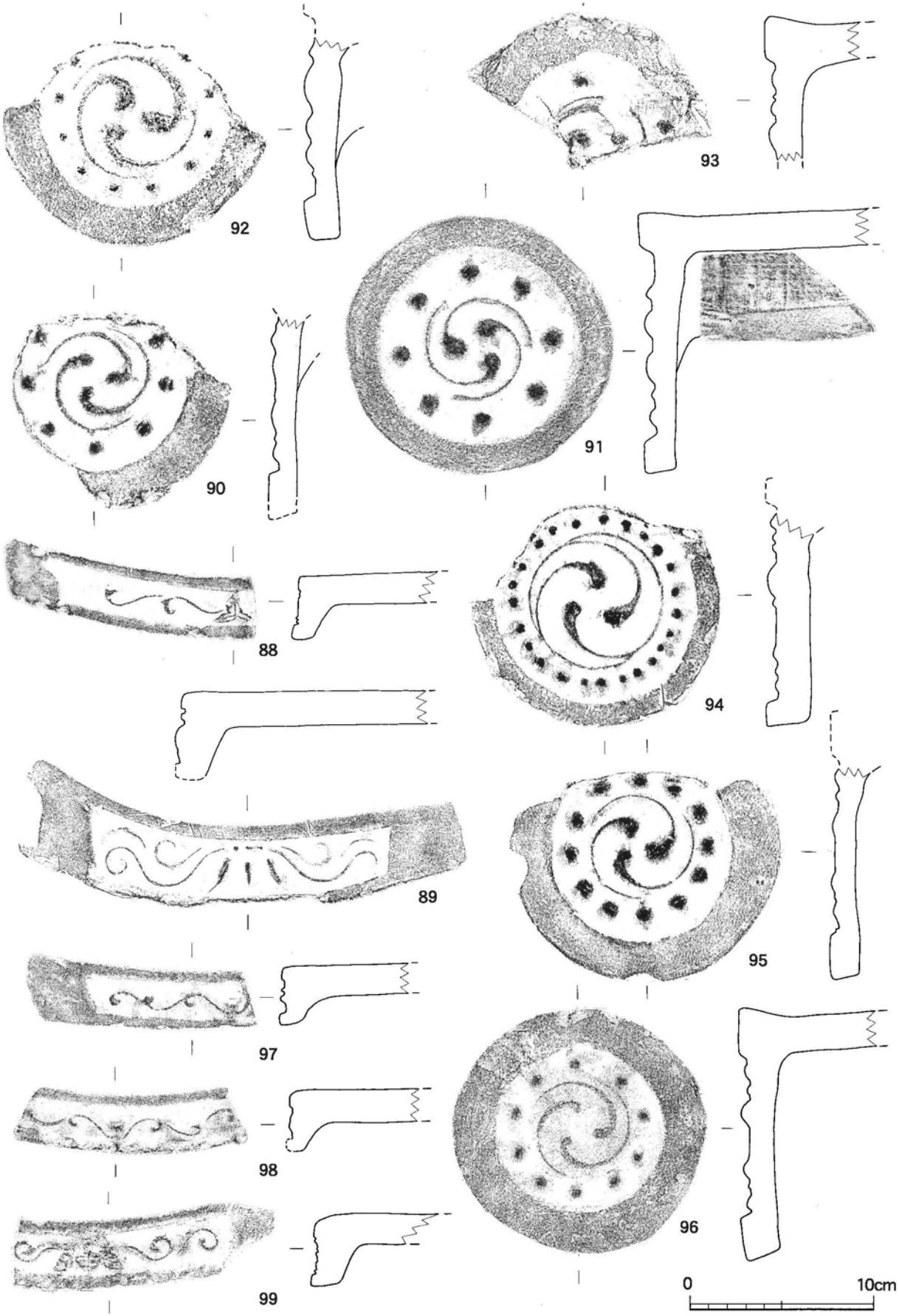


Fig.56　瓦拓影（1／3）

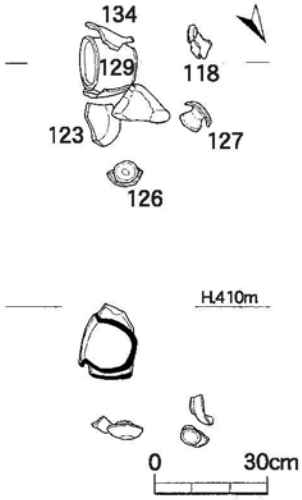


Fig.57　F－7区遺物状況実測図（1／20）

Fig.58　F－7区遺物出土状況（東より）

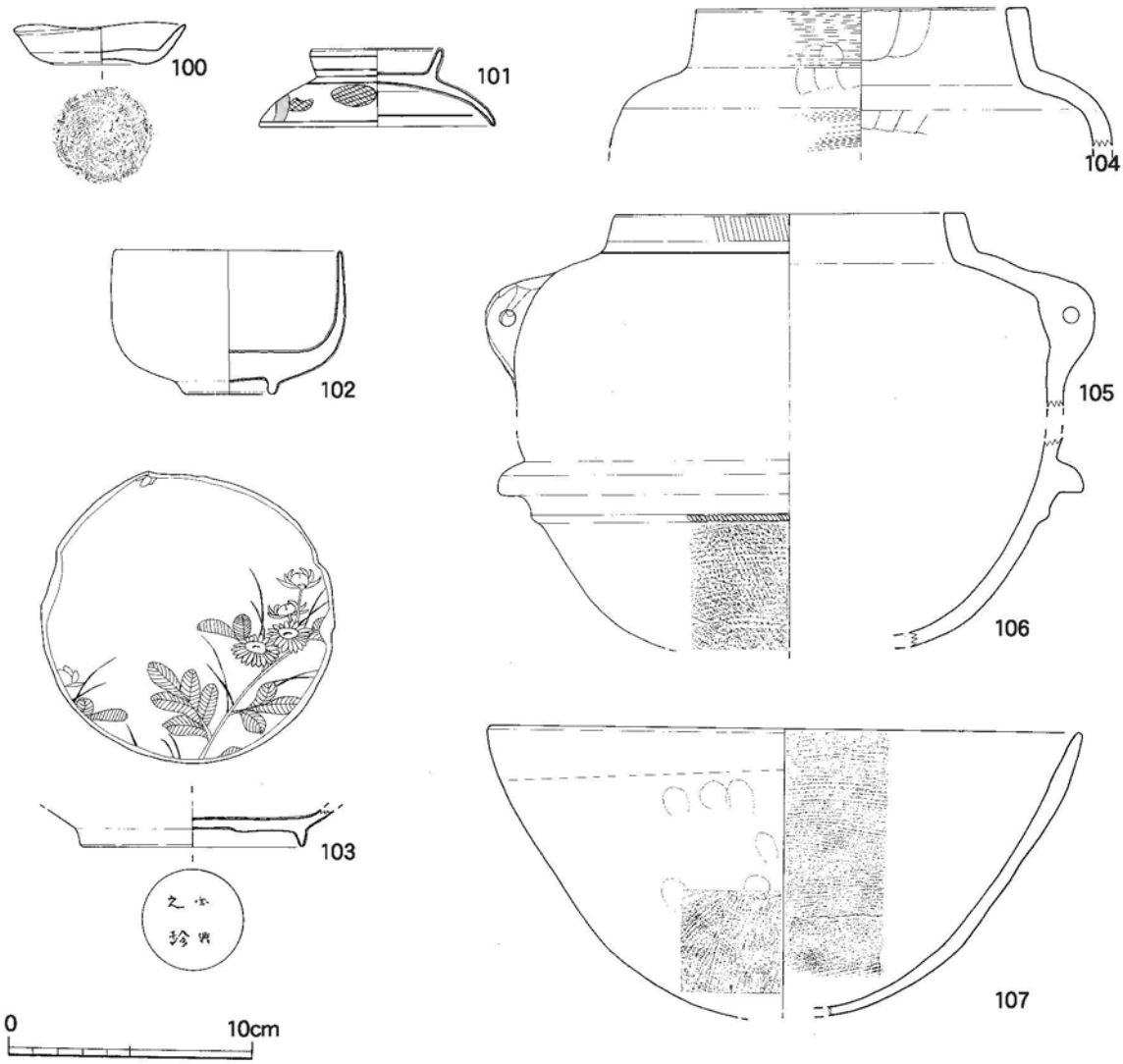


Fig.59　包含層出土遺物実測図１（1／3）

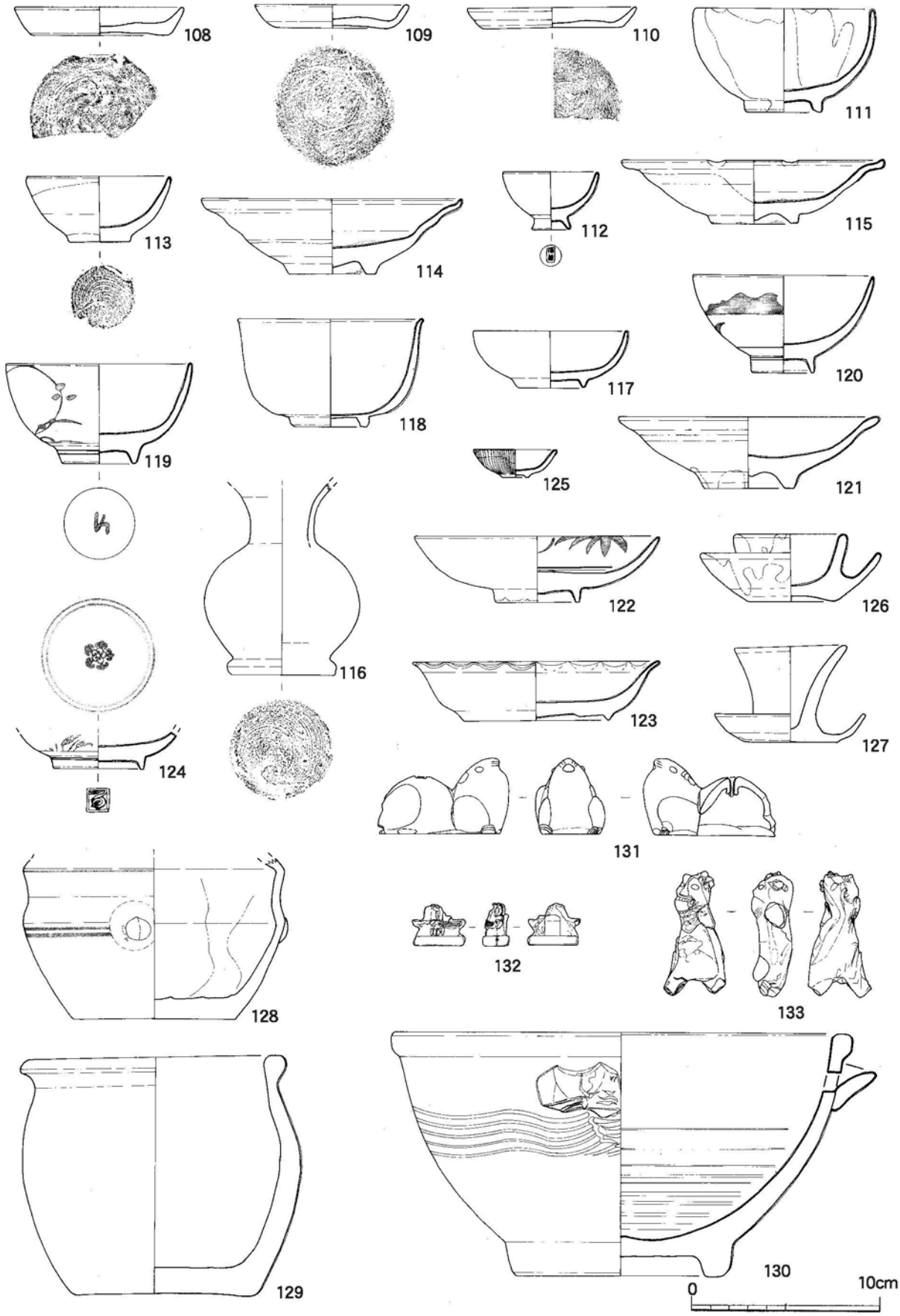


Fig.60　包含層出土遺物実測図２（1／3）

ラッパ状に外反する。口縁部には油煙が遺存している。128は備前の陶器瓶である。鉄釉の上から黒釉が上掛けされ、底部には目砂が付着している。129は口径が14.4㎝、底径9.6㎝、器高が12.7㎝の陶器壷で、口縁部は短い嘴状をなす。胴部が飴釉のほかは無釉。備前か。灯明皿（126・127）や輪花形青磁皿（123）、白磁碗（118）とともに一括して出土した。この壷には瓦器竈が覆い被せてあり、納骨器として使用されたことが想起される。130は陶器の片口鉢で、口径は24.4㎝、器高は12.9㎝を測る。口縁部は釉剥ぎで、高台は無釉。見込みにはハケ目で渦巻き状の圏線を、外面は鉄釉の白色化粧土で波状文を描いている。131は押型成形した白磁の兎形水滴である。長さ８㎝、高さは４㎝を測る。18世紀代のもの。132は素焼きの内裏雛形人形で、箱庭に飾ったものか。133は素焼きの手捏ね人形。134はＦ－７区から出土した陶器壷の口を覆っていた瓦質の携帯竈である。内面には火受けの突起が付き、下半部には焚き口の切り込みが透き取られている。135は口径が32㎝、器高が3.8㎝を測る瓦質の浅鉢である。肉厚の口縁部は外方に短く摘み出し、見込みには梅文が陰刻されている。136は底径が27.4㎝の瓦質の鉢で、内面には擂り鉢状の深いハケ目痕がある。

137は頁岩質の手持ち式砥石で、巾が2.1㎝、厚さは0.9～1.1㎝を測る。砥面は４面である。

142～146は銅銭である。143・144は1093年初鋳の「元祐通寶」、145は1078年初鋳の「元豊通寶」である。

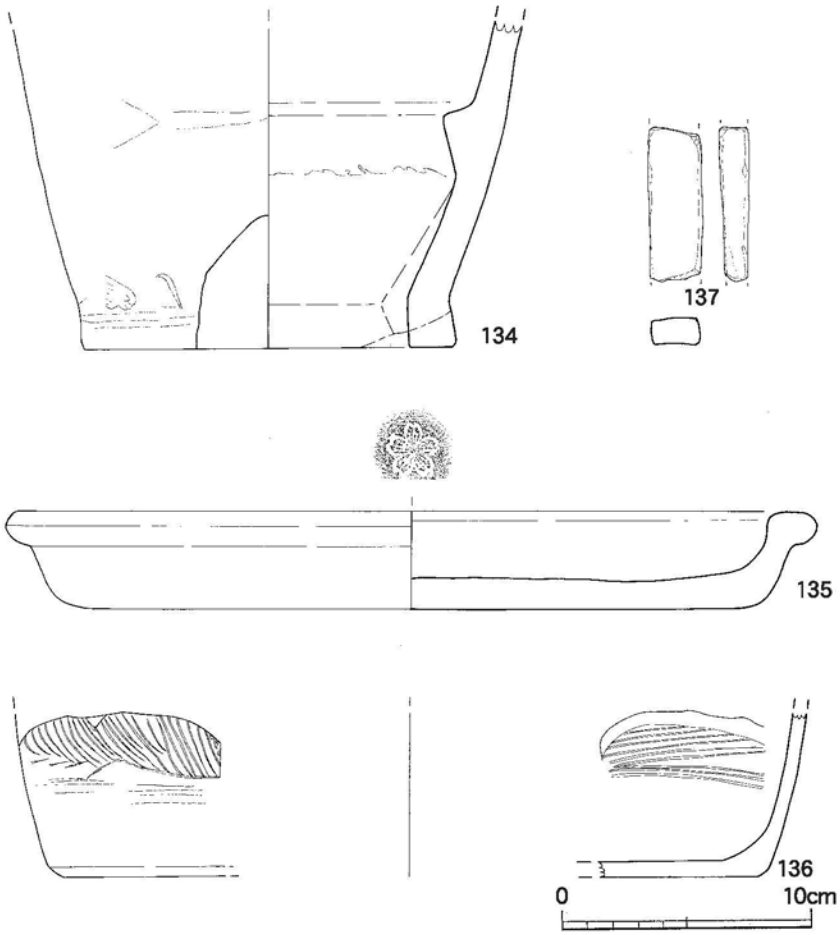


Fig.61　包含層出土遺物実測図３（1／3）

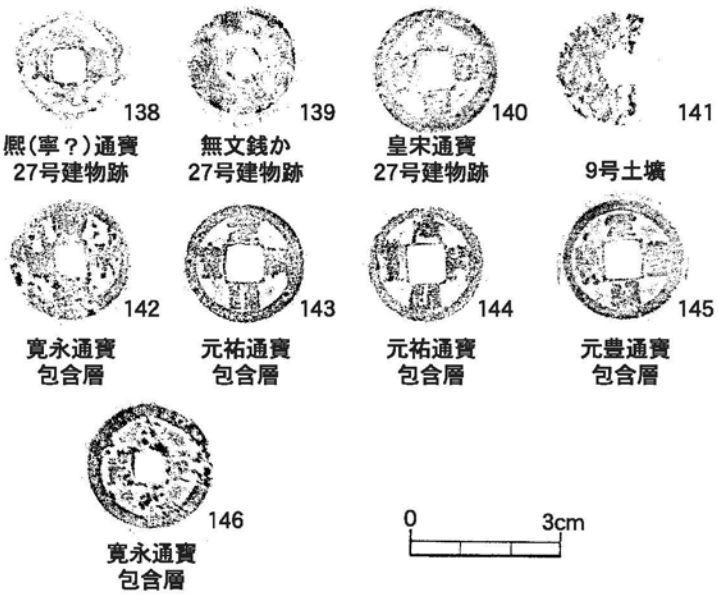


Fig.62　銅銭拓影（2／3）

142・146は「寛永通寶」である。

170～192は包含層や撹乱壙から出土したＳタイプの土錘である。長さは3.85～4.7㎝、直径は1.1～1.68㎝、重さは７～13ｇである。

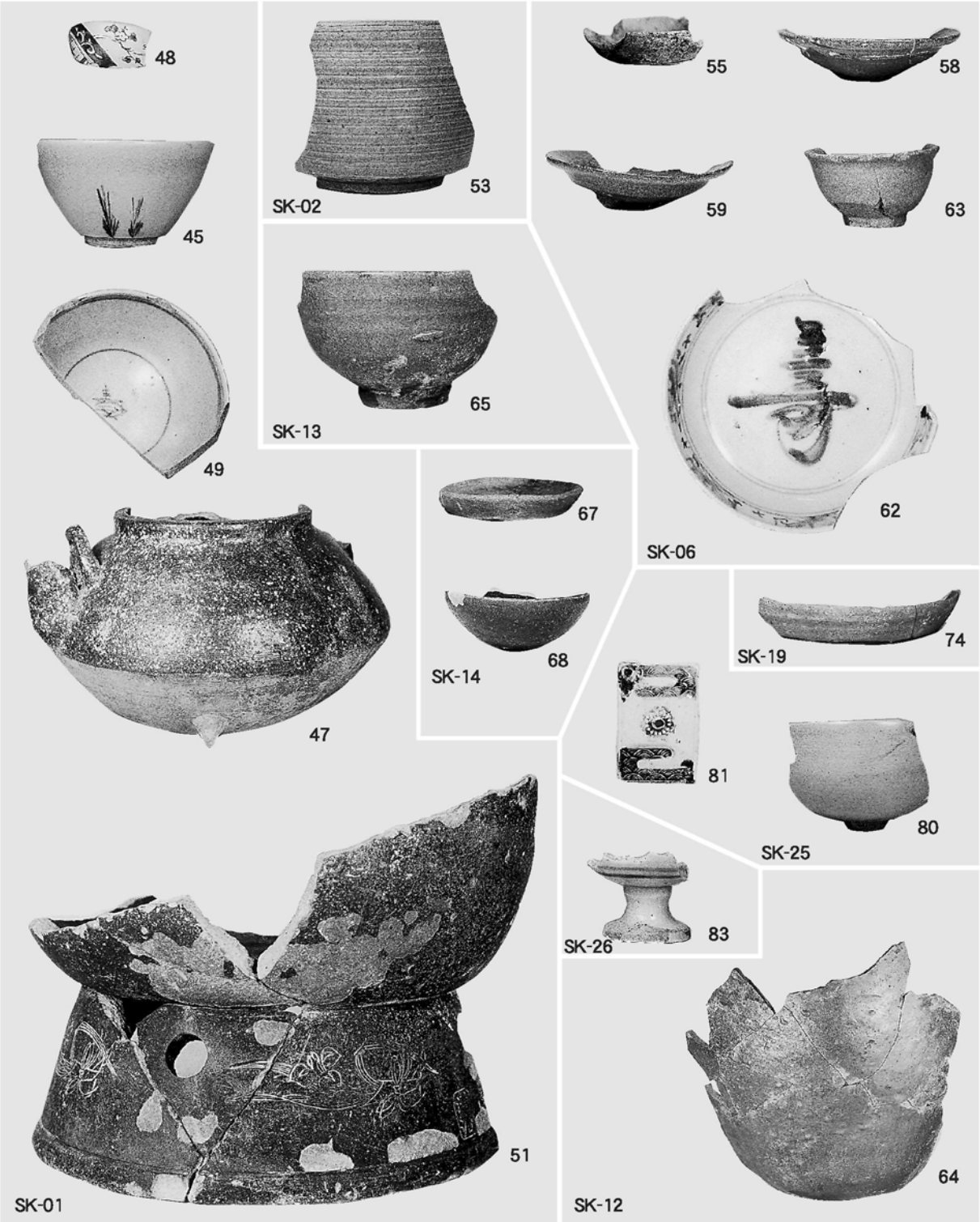


Fig.63　土壙出土遺物（縮尺不同）

Ⅲ．おわりに

第153次調査区は、博多遺跡群を構成する「博多濱」と「息の濱」のふたつの古砂丘のうち、湾口に面した「息の濱」の北東側の緩斜面上に占地している。この「息の濱」は鎌倉後期以降の新開地で、中世末の安土桃山時代から17世紀初めには嶋井宗室や神屋宗湛などの豪商たちが住まいする博多の中心域となる。発掘調査の概要については本文中で簡単に述べたが、すべてを網羅して遺跡の提起する情報や問題点を十分に検討したとは言い難い。ここではその成果について整理し、今後の調査に備えたいと思う。

発掘調査では、２面の遺構面を検出した。このうち第１面は、17世紀以降の黒田藩時代のものであり、幕末期までの遺構も含まれている。また、下層の第２面は室町後半期に比定される。

検出した遺構のうち特筆されるものに基礎石列をもつ建物跡と青銅製品や鉄製品を埋納する深い土壙がある。建物跡は、幅が100㎝、深さが70㎝の溝内に拳大の円礫や角礫を密に充填した堅固な基礎石を擁する。規模的には南側桁行の中央にある框状の扁平な円礫を中心にして復原すると桁行長は7.2ｍで４間２尺、梁間長は4.2ｍで２間２尺になる。基礎石列の堅固さと建物規模の大きさから構築される建造物の重厚さが窺われる。また、この建物跡の出入り口と推考される框状の石組の南には青銅製品と鉄製品を埋納する土壙（SK－21）がある。この土壙の深い壙底には、銅盤や銅瓶、鉄壺が建物跡に向かうように南壁を背にして立て並べられていた。覆土は自然発生的堆積ではなく、一気に埋め

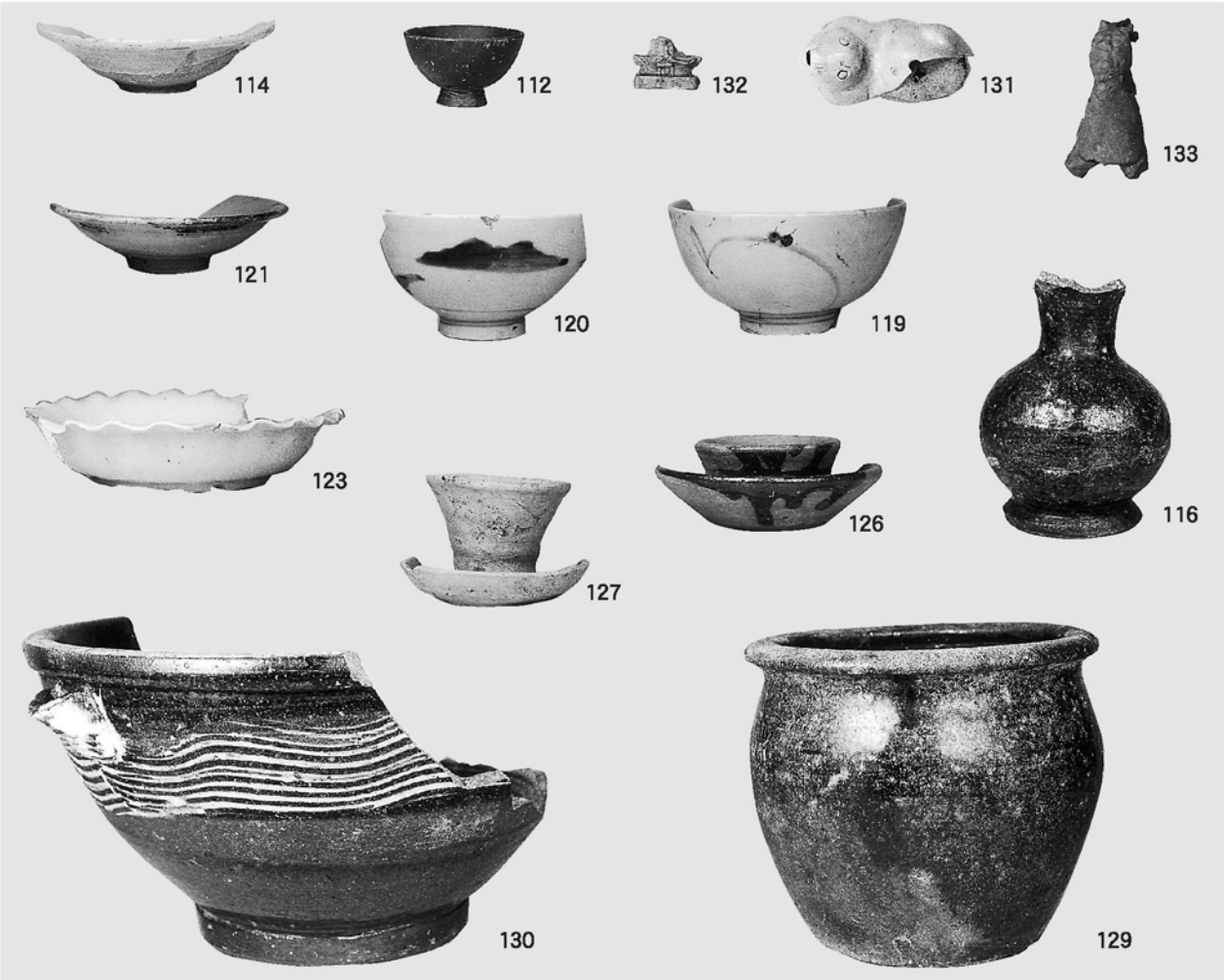


Fig.64　包含層出土遺物（縮尺不同）

戻された深い単一層で、上層は被熱して赤変した基礎石列と同じ焼土塊や炭片が堆積していた。

この埋納等の状況には、明らかに建物跡と対峙した意図が窺われる。短絡的に換言すれば、建物の建築に先立って行われた祭祀のひとつ、鎮壇具としての機能が想起される。東京都の武蔵国府関連遺跡では、土壙中に正立した２本の銅瓶の間に銅製香炉を倒立して埋納した事例があり、壁面に背を向けて建物と向き合った銅盤や伏せた鉄壷はこれに通ずるものがある。その機能が妥当であれば、何故に埋納したかが問われる。建物跡としては特別に長大なものとは言い難く、建物跡に何らかの特別な機能が付与されていたとも考えられる。また、青銅器には15～16世紀の古い要素があるが土壙の覆土には17世紀の遺物が含まれる。建物跡も主体を示す遺物は17世紀代のもので、伝世されたと考えれば時期的には大きな矛盾は生じない。先述したように戦国末から江戸初期にかけてこの地は、博多商人の中核域をなしている。西隣には伊藤小左衛門ゆかりの万四郎神社があり、嶋井宗室や神屋宗湛の屋敷跡も近く、これらの事実をも加味して検討し加筆することが求められる。

遺物No	出土遺構	法量（長×最大径cm）	重さ（g）	タイプ	Fig
147	SB-27-2	5.81×2.56	32	M	65
148	SB-27-2	5.88＋α×2.41	25	M	65
149	SB-27-2	4.29×1.21	6	S	65
150	SB-27-2	4.42×1.41	7	S	65
151	SB-27-2	3.67＋α×1.48	7	S	65
152	SB-27-2	3.82×1.44	8	S	65
153	SB-27-2	3.82×1.39	7	S	65
154	SB-27-2	3.5×1.34	6	S	65
155	SB-27-2	4,34×1.25	6	S	65
156	SB-27-2	4.26×1.62	9	S	65
157	SB-27-2	4.26×1.44	8	S	65
158	SB-27-3	3.7×1.68	7	S	65
159	SB-27-3	3.78×1.33	5	S	65
160	SB-27	4.69×1.55	9	S	65
161	SB-27	4.75×1.67	11	S	65
162	SB-27	4.36×1.43	8	S	65
163	SE-07	3.58＋α×1.4	8	S	65
164	SE-08	4.64×1.64	10	S	65
165	SK-06	3.89×1.15	5	S	65
166	SK-10	4.37×1.46	8	S	65
167	SK-14	4.46×1.52	10	S	65
168	SK-21	4.54＋α×1.48	9	S	65
169	SK-24	4.11×1.48	7	S	65
170	包含層	4.2×11	11	S	65
171	包含層	3.48＋α×1.55	8	S	65
172	包含層	4.7＋α×1.29	6	S	65
173	包含層	4.36×1.59	10	S	65
174	包含層	4.3＋α×1.15	6	S	65
175	包含層	3.62×1.55	8	S	65
176	包含層	4.91×1.68	13	S	65
177	包含層	3.47×1.53	10	S	65
178	包含層	3.89＋α×1.52	10	S	65
179	包含層	4.56＋1.52	11	S	65
180	包含層	4.6×1.32	7	S	65
181	包含層	3.85×1.5	7	S	65
182	包含層	4.11×1.36	6	S	65
183	包含層	3.78＋α×1.25	4	S	65
184	包含層	2.5＋α×1.29	4	S	65
185	包含層	4.2＋α×1.58	8	S	65
186	包含層	3.46＋α×1.6	6	S	65
187	包含層	4.0＋α×1.6	5	S	65
188	カクラン	3.92＋α×1.66	8	S	65
189	カクラン	4.14×1.28	6	S	65
190	カクラン	4.23×1.49	9	S	65
191	包含層	4.88＋α×2.28	20	S	65
192	カクラン	5.33＋α×2.36	27	S	65

土錘一覧表

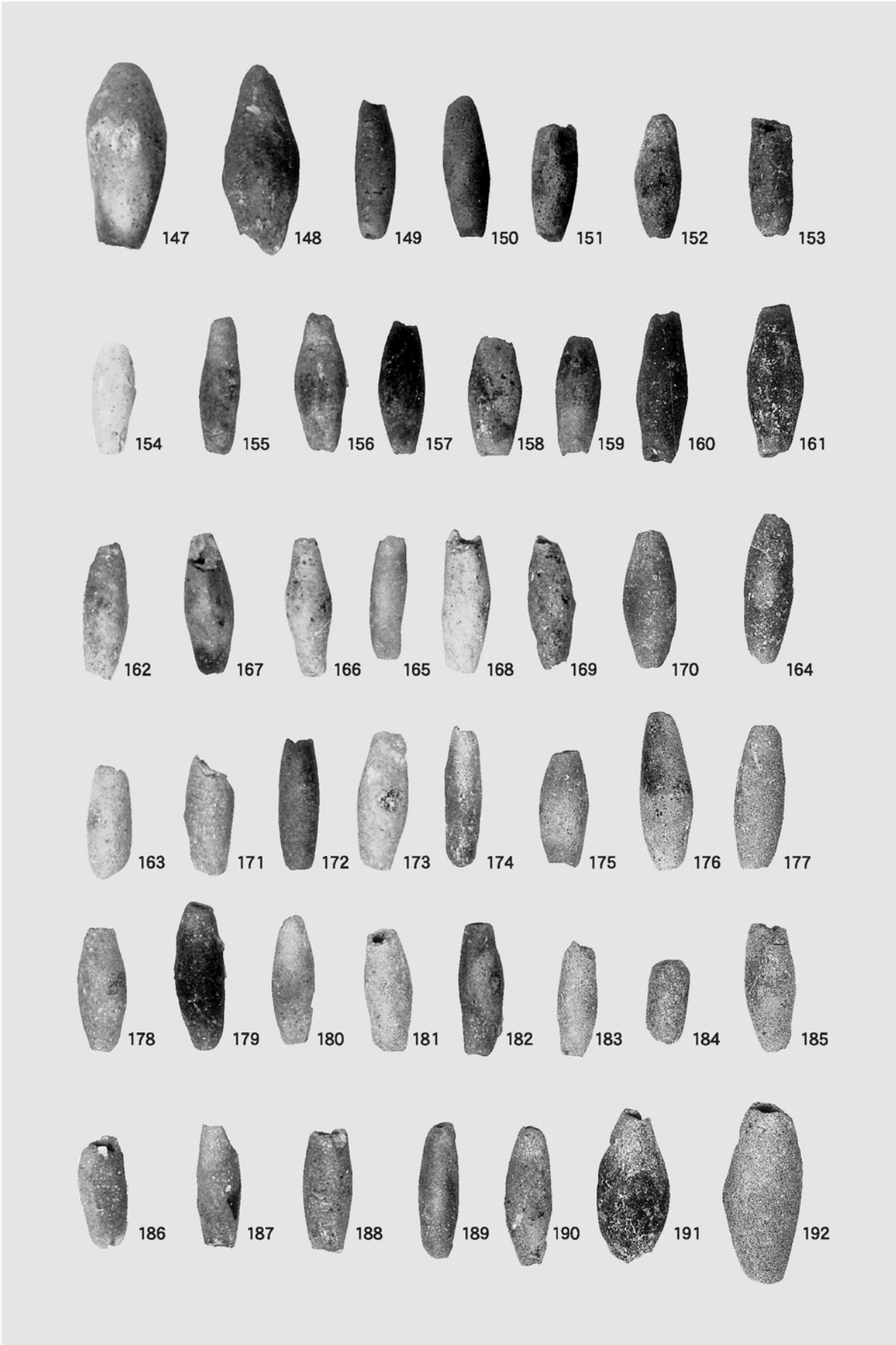


Fig.65　出土土錘（縮尺不同）

江戸時代の地誌に見る万四郎神社の由緒

髙　山　英　朗

本論では、今回発掘された建物遺構が具体的にどのような建物であったかを、万四郎神社の由緒を手がかりに文献資料を用いて検討したいと思う。

まず、江戸時代の地誌類に万四郎神社がどのように記述されているかを見てみよう。貝原益軒が編纂し、宝永四（1707）年に成立した筑前国の地誌「筑前国続風土記」には、万四郎神社に関する記述は見られない[1]。この「筑前国続風土記」を補うかたちで加藤一純と鷹取周成によって編纂され、寛政十一（1799）年に成立した「筑前国続風土記附録」（以下、「附録」と略記）では、巻之四「濱口町上」の項に「萬四郎夷社　此町の西側商家の裏にあり。何の比にや萬四郎と云者、此やしきに住して鎮守に祭りしといへり。」[2]との記述が見え、当時、万四郎神社は万四郎夷社と呼ばれ、濱口町上西側の商家の裏にあり、いつの頃からか、この商家に住んでいた万四郎という者が鎮守として祀ったものであることが知られる。

さらに「附録」の再吟味というかたちで文化十一（1814）年に青柳種信に編纂が命じられた「筑前国続風土記拾遺」（以下、「拾遺」と略記）の巻之四「濱口町上」の項には「此町に万四郎恵比須と称する社あり。いつの代より鎮祭りしかしられす。昔ハ万四郎稲荷と唱へしよし。是又いつれの比よりか恵比須とは唱へしならん。何れも万四郎といふ商家の者の祭りし末ならんといへり。」[3]と「附録」とほぼ同様の内容が記されているが、もともとは万四郎稲荷と呼ばれており、後に万四郎恵比須と呼ばれるようになったことが分かる。

また、津田元顧・元貫父子が編纂し、明和二（1765）年に成立した「石城志」の巻之三には「萬四郎夷社　濱口町中番西側に在、實は稲荷を祭れりと云。いつの頃にや、萬四郎といへる者、此屋敷に住して鎮守にいはひ置るよし。また、野狐の名とも云。」[4]と、「拾遺」と同じ内容の記述があるが、万四郎が野狐の名前であるとも伝えられていると記されている。また、社の所在を濱口町中としている点は「附録」と「拾遺」の記述と異なっている。

以上の地誌類の記述をまとめると、万四郎神社は創建の年代は不明であるが、博多の濱口町の商人万四郎が屋敷裏に稲荷を祀った社であり、いつの頃からか万四郎夷社と呼ばれるようになった社であると言えるだろう。

しかし、奥村玉蘭が筑前国の名所を挿絵入りで紹介した「筑前名所図会」（以下、「名所図会」と略記）の巻之二では、上記の地誌類とは異なり次のように記述されている。

「万四郎ゑひす社ハ濱口町人家の裏にあり、實ハ稲荷を祭るといふ（以下、割注）此家ハ伊藤小左衛門といふ富豪の宅跡なり、寛文の頃小左衛門兵器を朝鮮に渡せる罪により長崎にて磔にせらる、其家の奥に年久しく住し狐ありて、小左衛門長崎にありけるに往来して事を通しけるとそ、家亡ひし時死しけるを稲荷と祭るといふ、又万四郎といふハ小左衛門か子の名なりといふ、里俗の説のままにここに記しぬ」[5]

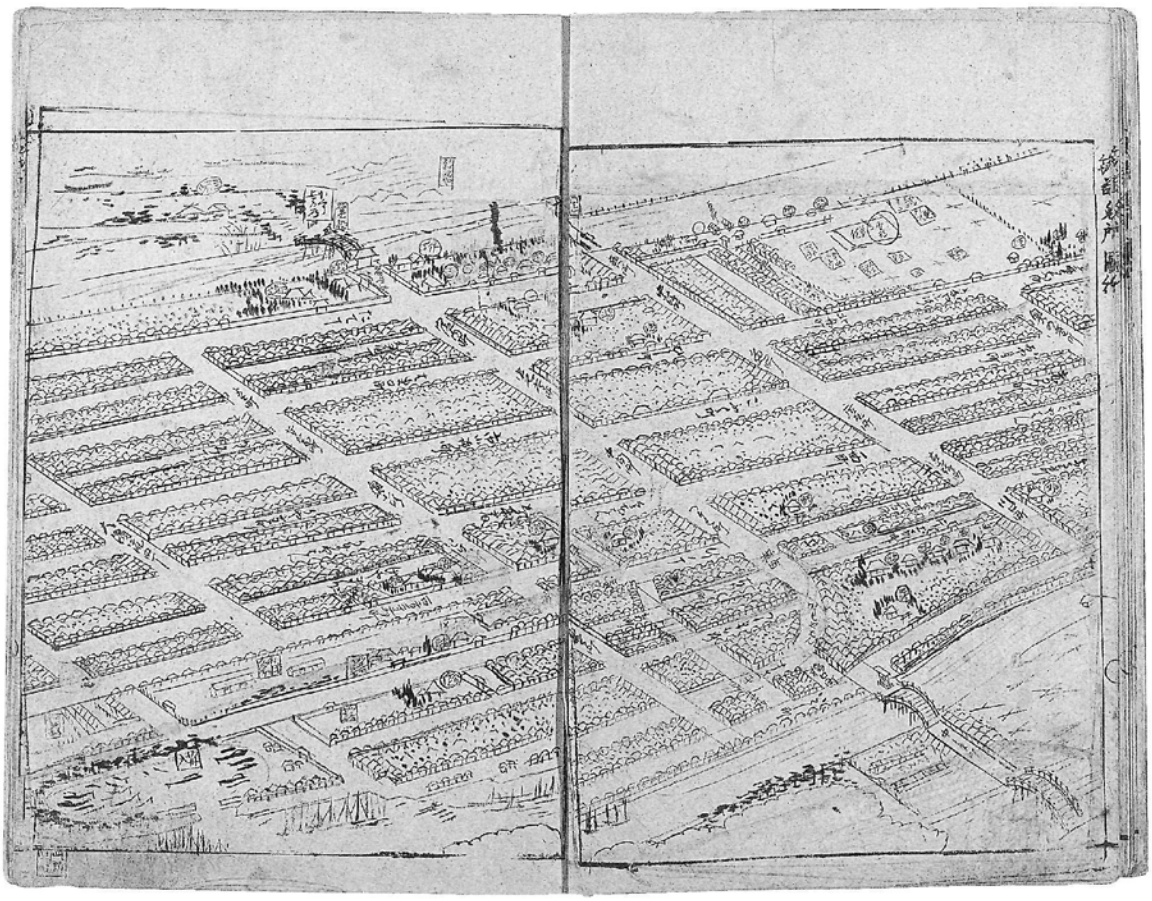
社が濱口町の町人の屋敷裏にあったという記述は、上記の地誌類と同じであるが、その屋敷が博多商人の伊藤小左衛門[6]の屋敷跡であったことが記されている。また、小左衛門の屋敷に住んでいた狐が、屋敷が無くなった際に死んだため稲荷として祀ったこと、万四郎というのは小左衛門の子供の名前であるとも記されている。「名所図会」が成立したのは文政四（1821）年であり、寛文期からは160年近くの歳月が流れており、玉蘭も「里俗の説のままにここに記しぬ」と記しているので、確たる証拠が

ある説ではないと思われるが、少なくとも「名所図会」が書かれた当時、民衆の間に伝えられた万四郎神社の由緒について知ることが出来る。

ここまで江戸時代に著された地誌類に万四郎神社が、どのように記載されているか見てきた。ここから今回発掘された建物遺構について、少なくとも博多商人の屋敷であったことは指摘できよう。この屋敷に居住していた人物については、伊藤小左衛門や万四郎の名を挙げられるが、この点については文献資料だけでなく、今回の調査により明らかになった屋敷の規模など考古学的側面から更なる検討を要すと考える。

---

(1) 貝原益軒編、伊東尾四郎校訂『増補筑前国続風土記』(文献出版、第4刷、2001年)
(2) 加藤一純・鷹取周成編、川添昭二・福岡古文書を読む会校訂『筑前國續風土記附録』上巻(文献出版、1977年)109頁
(3) 青柳種信編、広渡正利・福岡古文書を読む会校訂『筑前國續風土記拾遺』上巻(文献出版、1993年)107～108頁
(4) 津田元顧校定・津田元貫編録、檜垣元吉監修『石城志』(九州公論社、1977年)78～79頁
(5) 奥村玉蘭著、田坂大蔵・春日古文書を読む会校訂『筑前名所図会』(文献出版、1985年)215頁
(6) 江戸時代初期の博多の豪商で、福岡藩の長崎御用を勤めた人物。寛文七(1667)年に持船が対馬へ漂着したことをきっかけに朝鮮への抜け荷が発覚し、磔に処された。



「博多惣細図」(「筑前名所図会」巻之二より、福岡市博物館蔵)

博多遺跡群153次調査出土祭祀具の調査について

比　佐　陽一郎（福岡市埋蔵文化財センター）

博多153次調査で出土した金属製祭祀具一括資料の内、非鉄金属である花瓶１点、盤２点の計３点について材質調査を行った。また、同じ博多遺跡群の110次調査では、153次の盤⑵とよく似た形状の類品が出土しており（福岡市登録番号982700028）、比較のため合わせて調査を行った。これらの資料はいずれも全体が緑青に覆われており、銅を主体とする金属であることは容易に推測される。しかし銅単体なのか、あるいは他の金属との合金なのか、また合金であればどの様な組成なのかはもちろん、微量成分に至っては肉眼で推察することはまず不可能である。

調査は蛍光Ｘ線分析法により行った。この方法では試料にＸ線を照射し、含有する各元素から発生する二次Ｘ線（特性Ｘ線）を検出器でとらえてＸ線エネルギーとその強度をピークとして表すことで、含まれる元素の種類や量を知ることができる。今回の対象資料である花瓶は高さ約19㎝、盤は径が36㎝と、分析資料としては比較的大きなものばかりであるが、文化財として当然、非破壊が原則であり、分析作業は大型資料用波長分散型の装置（フィリップス社製：PW－2400改）を用いて、資料をそのまま設置できる形で行っている。分析結果は、特に合金としての特性を知るには定量値で示すべきであり、今回使用した装置でもＸ線の強度値から付属のコンピューターで定量値に自動的に換算することは可能である。しかし非破壊による表面分析の場合、腐蝕や埋土の付着の影響により本来の組成が保証されないことや、何よりもＸ線強度値を正しい定量値に校正するための標準資料を持たないことから、ここでは定性的な結果の表示に止めることとする。分析を行った部位や、資料の設置状況は写真に示すとおりである。

まず、盤⑴であるが、検出された元素の中で金属に関係するものとしては銅（Cu）が最も強く、次いで鉛（Pb）、錫（Sn）があり、いわゆる三元系の青銅であることが分かる。また微弱なピークとして銀（Ag）、ヒ素（As）、ニッケル（Ni）が検出される。他に鉄（Fe）も見られるが、鉄は埋土中にも豊富に含まれる元素であり、資料に元々含まれているものとの区別は困難である。盤⑵も定性的に見ると微量元素も含め⑴とほぼ同様の結果であるが、ピークの高さに若干の差異が見え、銅が強く、鉛、錫がそれぞれ弱くなっている。ただ、この違いが本来のものか腐蝕等によるものかは現状では不明である。

花瓶もやはり銅、錫、鉛の青銅ではあるが、ヒ素、銀といった微量元素が見あたらない。ただし、この場合、資料の形状が複雑で分析に適した平坦部分が無く、脚の縁辺部を対象とした結果としてＸ線の照射面積に対して資料が収まっていない点なども考慮する必要があるのかもしれない。

参考に分析を行った博多110次出土の盤では、銅、錫、鉛が強く検出される点では共通するものの、微弱なピークとしてアンチモン（Sb）、亜鉛（Zn）が見られる他、ヒ素が他の資料に比べて強く現れている反面、銀が検出されないといった多くの相違点が看取され、153次出土の一群とは異なる様相を示している。

中国古代青銅器を模した仏具などは、考古学的には多くの先行研究が見られるが、材質分析など自然科学的調査はそれほど進んでいないようである。今回、４点を分析しただけでも、形状と材質が必ずしも一致しないことが指摘された。今後、系譜などより細かい研究を行うためにも、材質と共に鉛同位対比などの分析調査が行われることを期待したい。

盤（1） 表面

盤（1） 裏面

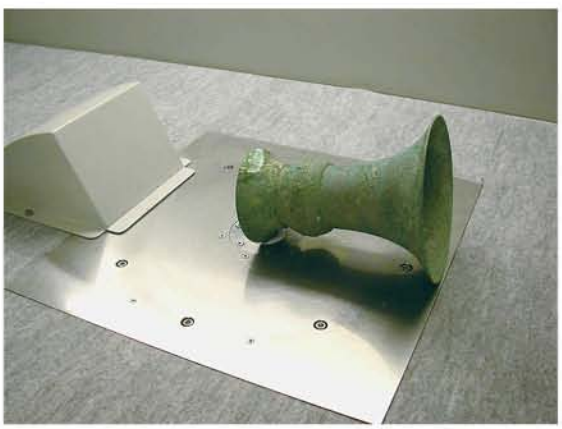
盤（1） 分析状況

盤（2） 表面

盤（2） 裏面

盤（2） 分析状況

花瓶



花瓶 分析状況

※写真中の赤丸は分析対象範囲を示す

報 告 書 抄 録

ふ り が な	はかた
書 名	博多112
副 書 名	博多遺跡群第153次調査報告
巻 次	
シ リ ー ズ 名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シ リ ー ズ 番 号	第942集
編 著 者 名	小林義彦　比佐陽一郎　髙山英朗
編 集 機 関	福岡市教育委員会
所 在 地	〒810-8621　福岡市中央区天神１丁目８番１号
発 行 年 月 日	2007年３月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北 緯 ° ′ ″	東 経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 （㎡）	調査原因
		市町村	遺跡番号					
博多(はかた)遺跡群 第153次	福岡市(ふくおかし)博多(はかた)区 下呉服町 425番２	40130	0121	33° 36′ 0″	130° 24′ 29″	20050722 ～ 20050922	132	共同住宅 建設

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
博多遺跡群 第153次	集落	近世	建物跡　井戸跡 土壙　埋甕	土器　陶磁器 鉄製品　銅製品 石製品　土製品	

博　多　112

―博多遺跡群第153次調査報告―
福岡市埋蔵文化財調査報告書第942集

2007年（平成19年）3月30日

発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1－8－1

印　刷　協文社印刷株式会社